912.4
Ti238i

戲曲叢書

女生玉心中油地獄

912.4 Ti238こ

国立国会図書館蔵書

国立国会図書館
29.7.22

337110

嘉平次 おさが 生玉心中

正德五年八月日初興行、作者六十三歳

近松門左衛門作

上卷

今に傳へて老松の〳〵。替らぬ色を頼まるゝ。松が枝の宮柱今に榮て數萬人。心々の願立に。神のお身さへ、いそもじの。增て流れの憂ふしや。日毎に替る身の勤けふ〳〵がいの神詣で。道頓堀を天神へ。かごも一里を飛梅や。社のめぐり浮れ出。見渡せば數々の花屋植木屋立並び。いろ賣〳〵花の色うる。我もいろ賣る身は仇花の。花に價の高下があれば。勤の品も段々の品々有るも理はりや。花と色とは元ひとつ。されば身を賣る銀の名を。花代とこそ名付けれ。先鉢植の作り松。すんと流しの一枝は。太夫の威勢備りて。悠氣の嵐手くだの雨。無理な口説の霜雪も。驚ず痛ず彌增に。情の緑り蔓りて。松の位と譬られし も憎からず。春立行ば色失て。淋しき梅も捨られず。是天しよくの姿にて。一夜流れの軒端の梅の。仇な袂に香を留て。さんさ思ひの種かひの。根からいやなら添ふ氣じやないに。だまされて憎やつらやを逆まに。客に泣せてきぬ〳〵の。別れあやなき高浦草。局女郎に

なぞらへて。牡丹畠の名盡しに。大臣も目をやり手の玉が。忍ぶ戀路をせきだいの。女闇夫蘭は呂州の姿。白と詠めて白牡丹。しやんとしてからいや味無く。然も色香の深見艸。思ひ切れとは死ねとの事か。生て添れぬ浮世なら。いつそ煙に成たやな。しん氣もやして待宵に。似たりや似たりけいせん花。暫し休ふ木影を宿の。枝は木槲我身はちやこく。うるさき里の勤ぞと。誰かは黄楊や柏槇やっ樅南天に小手まりに。いとし男と射干の。扇のなりに末廣の。逢瀬を祈る神垣に。柏手ならぬ柏屋の。我名も嵯峨の若楓。戀草千草思ひ草。詠めらるゝも詠むるも。同じ色成る袂百合。扇かざして神々詣で。安井生玉清水坂を。しやなら〳〵〳〵〳〵ちよこ〳〵走り。しやんとして見よや。柏屋嵯峨ハはすはにござる。戀のいぢ酒ヤトン〳〵手元で懸る。押へてかゝる。どうでも嵯峨はぬれ者じや。油壺から出すよな女房。しんとろとろりと見とれる女房。すねる男をぽつ懸て。そこら〳〵をずんづと飲ましやる〳〵。サアエイトン〳〵。エイトン〳〵〳〵〳〵。じんぞ一夜はお手枕。日影色ぞる五月棚。草の異名はさま〴〵に。よむ共よしや葭簾。西の茶屋から我を呼ぶ。忙しない迚見殘して。見すつる花や恨むらん。色の勤の憂ふしの。峠をこへて伏見坂。戀のないにも習ひ迚。あたら肌ゑを柏屋の。嵯峨は大和の一言客が。今日は天滿の社内の茶屋で。酒と出懸て遊ばんと。一昨日からの揚つゝけ。空も雨氣の駕の外樋。賣木の花に氣を晴し。清水屋にこそ入にけれ。茶屋には待兼ィ嵯峨さま。駕の衆なんとして遲かつた。お客樣は待こがれ唯獨り飲でじや。いざ先あれへと云ければ。さればいのこつい客のくせに。揚の日は半時も側におかねば。損の樣に吸付て居たそうな。夫で勤が續く物か。是駕の衆頼みます。私は雨氣で頭痛がして休で居ると間に合せ。盃の相手に成て日頃の手並にいきつかして下んせ。どつこい氣遣ひ成されますな。任せて桶でもたらいでも呑付てやりませう。是おか樣精出して豆腐燒しやれ。鱈も四五本燒しやれ冷飯も燒しやれと。からげおろして入りにけり。嵯峨は主の側により先刻に云ふておこした。蜆川の嵐の芝居へ便宜して下んしたか。樣子はどふでござんすぞ。何の如在致ましよ。お前からの書付を其儘持せて遣りました。心中の狂言の口上の所。直ぐにふれて貰ふたと。使はとうに戻つたがもうお出成さるゝ筈。定めし狂言に見とれて。夫でかな遲いかと云つゝあぶる豆腐より。嵯峨が心や憤るらん。假初の薄茶茶碗も馴染ては。濃茶茶碗や嘉平次は。嵯峨が情の錦手に。

染付られて親兄弟の。異見も耳に蓋茶わん。深編笠も隠れなく。嵯峨は見付て是爰じや。爰じやと招けばちよこ〳〵走。床几に腰を打掛て側へ寄たい抱付たい。云たい事のわくせさも。主が見る目憚かりて。他人向なる折柄に奥より何ぞお肴。銚子かや〻と手を叩あ〻いと引のがお定り。かまぼこ梅干すいな花車。氣を通して立ければ。のふ二日逢ぬはどうじやいのと。顔差入る編笠の下こそ戀の宿りなれ。嘉平次も恨さ此中は田舍客で平野屋にじやと聞たゆへ。いきか戻りに顔見よと溝側を用有りげに。いつ〻戻つ〻入もせぬ和中散買ふたり。ところ天やの水がらくりもそう〳〵は見て居られず。うろ〳〵すれば長町脇の子供が見知つて。ありや〳〵東の難波燒が坂町通ひ。柏屋通れば二階からちよいと招く。のつ是なんとしよと。惡口云ば傍りからはきよろ〳〵見る。親の内へはいかれぬ首尾。出店にも尻すはらずいつその事とをがけに。蜆川の芝居の曾根崎の狂言見て。醤油屋の徳兵衛と我らが思ひ引合せ。愛を晴す合點で其通一筆書て。小辨を頼ふで置て來た其ゑ見でか。けふ爰へおじやつたは天神樣の御利生。神も佛もなじみがほん。親仁の見せの燒物に壹文づ〻でも天神樣。お馴染故じやと云ひければ。さればいな其ゑ見ると嬉しうて。客を進めて此天滿と云ふ思ひ付。幸と此清水屋は。わしが前方扇風呂に居た時からの近付故。爰へ頼んで芝居へも呼に遣りやした。夫に付ても父御さんの内方へもまだいかれぬ首尾と有。是逃いたい見たいは私とても。ほんに〳〵寢た間にも忘れね共。終には末で女夫に成る大願ではないかいの。其間が互の辛抱人は次第に身を持上るがほんなれど。扇風呂のさがとも云はれた身が。晦日節季は前だれがけで。裏屋せど屋けんどん屋三界懸取に歩行ような。勤するのも澤山に逢ふ爲め。こなさんが大和橋の濱納屋借ての出店も。わしが近くにいよふ爲め。念比な宿では斷り立出店へ泊りにいくよさは。女夫所帶をする心。同じ寢の身に付樣で嘻しい。されば共一度は父御さんのお耳へ入ねばどうもならぬぞゑ。聞ば姉御さん堺筋の鹽町邊に縁付してごんすとや。此姉さんなと頼みまし。前方から父御さんにふ思はれて下んせ。昨日の晦日も内にいさんせず。わけの惡い評判聞ば。頭髪一筋づ〻ぬかる〻よりも苦しうて。氣をもんでもがいても身は裸なり工面はならず。大方は四日迄と私が請合おきやした。私一人なら死んでなりと仕廻ふが。こなさん惡ふいはするが口惜い悲しい。茶屋の勤する者は人の小むすこ唆かし。惡道に引入れるの不孝者にしてのける

と。十人が十人で。町の衆は思はんす涕がこぼれてうとましい。私可愛が定ならば。父御さん共姉弟御とも首尾よふしてくだんせと。涙ぐみたる眞身の詞更に勤と思はれず。嘉平次も共涙。今に初めぬ和女の心底過分〳〵。たつた一人の父親なり。一ッ屋の五兵衛として若い時は男をみがき。物の筋道りく儀を立て無理を云ふ人でもなく。子供が少しの色遊。五百目壹貫目遣ふたとて悔む人では無れども。何樣とも斯樣とも叶はぬ事が有るぞいの。今迄は隱したが弟の幾松とおれとが間に。十八になるおきはと云ふ妹が有る。元は在所一ッ屋の伯母の娘。後々は此嘉平次と從弟どし女夫にする約束で。藥の中から養ひ死なれた母の膽情で。物も著さ縫針綿もつむ機も織。算用もやりをる顏も十人並なれど。和女を除て此世界に女子が有ると思ふにこそ。綿をつまふが機織ふが。おきはゝ愚中將姫の再誕が。蓮の糸で一重羽織おりやる迚。見向もする平でない。されば共親の契約ちいさい時から言名付。けふ祝言あす祝言とせがまふゝ。一利屈こねたの。是親仁樣わしや畜生じやでざらぬ。種腹分ねど兄弟妹よ兄樣と言つゝも。夫婦になるは犬雞のする業。男も立た一ッ屋の五兵衛は。畜生を子に持たと言せてはわしも不孝。こなたも一分すたふ事成ぬ〳〵と云破る。そこらを詰らぬ錄親仁。ヵゝこりやでかした。ィヤよふ云た。ヤィ畜生吟味する根性で茶屋者と廚合。親にも知せず夫婦になる極めして。行先が借錢だらけ。人にうとまれ指さるゝ是が又人間か。五兵衛が目には畜生と見へるはい。茶屋者と縁切ておきはと女夫になるまで。門爪も蹈さぬと擲れぬ斗の首尾なれば。母屋へとては禁制姉聟は他人なりずんど堅い商人。ひとりの弟は眼病氣問談合も誰とせう。いろは茶屋から坂町掛て負ふた門は七八間。銀高わづか壹貫目餘り。身を刻でも當なければ。欠落か自害と思ひ定た所に。なふ生身に餌食天道人を殺さず。壁へてか此前扇風呂で。和女の事で大喧嘩した。西國橋の印傳屋の長作。あぢな事で其喧嘩から。兩方心底見屆け齒の根も喰合念比。彼奴は所帶持なれば少の取替もして呉る。此長作が肝煎で中國のお屋敷へ。親仁の柳から錦手建山昔羽燒の。皿の鉢の茶椀のと十五六兩が物賣て呉。晦日にお銀が渡る請取書ておこせと。四五日前に取りに來た。定めし昨日請取つろ。けふ嵐の棧敷に侍衆に付て居た。おれも芝居を立樣に棧敷の裏から音信て。直に爰へ來て呉と。旁〳〵約束して來た。今では此平に命も呉る挨拶。筈違へる男じやない。芝居はてに長作が銀持て來るか。爰へもぱつとはづるうし。こ

ちが出店の仕廻は少取る懸も有る。二百目あればざゝんざ。伏見坂から道頓堀。壹厘殘さず物の見事に仕廻ふて。待ていや節句から面も笠もぬがせう。＋借錢の笠はぬいでも傘は放されぬ。又降つて來た南無三寶あれ見や。あの菅笠着てくる女房鹽町の姉じや人。眼のわるい角前髮は弟の幾松。ムヤ〳〵ほんに恰好がよふ似やした。夫々爰へござんすこなさん逢てもだんないか。いかな〳〵保も見せともない。あの幾松が手を引てくる。腰のふとい尻のひよつと出た女子。姉の内の竹と云ふ飯焚。彼奴が見た事聞た事。其日の中に大坂中に事觸れ。こちが取沙汰何のかのと親仁に告るがいやさに。少濡懸て欺したりや。惚られ自慢でもう其事を觸歩行。夫であいつが名を筒抜と付て置く。そなたも姉の知てじやげな。ゝうるさ。どこぞにちよつと隱れ笠。隱れ簑なき身の置所。袴の雨外樋打明て。二人が膝を組合せ身を抱合て身を忍ぶ。姉は夫とも道のべの清水が店に暫とて。爰借ますとぞ休らひける。奥には猶も飲しこり踊るやら謠ふやら。騷ぐどさくさ若草の妻もこもれる袴の中。あられぬ姿顯れて姉や弟の見咎めん。嵯峨は奥より尋んかと慌さに猶も身を寄せて。締あふ中の冷汗は。外樋洩る雨の如くにて肌着も絞る計なり。奥の客がだら聲にて。こりやさがは何してじや色がなふて呑ぬはい。頭病がしやうば爰へ來て寢やしやれ。どりやお迎ひてか。返せ〳〵さが樣返せ。＋爰にか。酒飲まいとて手があるいと。姉に取付く手をもぎ放し。＋狼籍な嵯峨とやらじやどざらぬぞ。こちや道通り。雨宿りに茶やの店へ腰懸れば。賣物と思やるか。阿呆くさいと叱られて。南無三寶嵯峨のお山と取違へ。爰岩山へ登ろとした。御免〳〵のちろ〳〵目傍りを見廻し扨てそな。爰岩山から見おろせば。嵯峨は一目に見付たぞ。袴から帶の端が見へるぞ。嵯峨をさがし出さうかと。寄らんとすれば、是々。出まする〳〵免さんせと。外樋の影より這出て。こなさん逢欺して隱れんぼしたればば。つい探し出された。其の代になんぼ成と呑さんせ。どこのお内儀樣やら麁相な堪へてくだんせ。皆などんせ〳〵と奥に入れば。嘉平次は嵯峨を放れしさが松茸。より殘されし風情にて袴に縮んて居たりけり。姉は元より商屋の妻と成身の目も早く。鳥渡見るより一すやらず袴ない弟の嘉平次。扨情ない身持かな。引ずり出して叱らふ。いや〳〵供の下女が見る所。さながら若い者人中で恥もかゝされまい。身の成果が可愛ひ父樣がいとしひ。

おさはが心が無殘なと。様〻胸にせめ餘る涙は聲に早漏れて。なふ幾松。其方は仕合な能時に目を病で。淺ましい事見やらぬ。今のお山が今日一日は奥の客に身を賣ながら。座敷を忍んで駕に隱れて居た体は。外に深い人に逢手管とやらで有ふが。お山はお山の道にもせい。其深い男は誰じや知ぬが。有るまい事じやないかいの。定てこちの嘉平次もまあの通り。嘉平次の惡性ではお山と相駕で。外樋の下に屈んで居様も知れまい。見る目も悲しい淺ましい。是と云ふも親の恩を忘るゝ故。心もみだらに身を持崩し人にも人といはれぬ。父様や母様に娘は有り息子は有り。何を不足におさはといふ子を囉ふて。乳母を取り守を付け憂世話がやみたかろ。少さい時から女子の手業も教込。心もたまかに育て上。嘉平次と夫婦に成したらば身躰の藥なり。商ひの勝手も能繁昌もさせたいと。嘉平次が可愛ひばつかりに。世話をやんで病死の。母様の恩を早忘れ。可愛げにおさはもほんの天竺牢人。店の若い者共あの女子始として。とやかふ評判する時は。姉が耳へ八寸釘を打るゝよりも猶こたへる。若も自然此駕にお山と嘉平次と乘合て居る所。今の客が見付て引摺出して踏迚も。なんと言譯有るものぞ。見こそせぬ聞こそせぬ。定て再々行先で恥をかきつふ。其身ひとりの恥かいの親兄弟は何になれ。亦世の便はなけれ共。あの人故に迷つしやる母様がいとしひと。慈悲の涙も目に余る駕に當ての口說言。嘉平次は身も縮み命も縮まる計にて。消も入たき心地なり。幾松は嘉平次が駕に有とも氣も付ず。〻曲もない兄きの必今ならでは申さぬが。私が眼病もあの人故聞て下され。有る事かおさはとそちと夫婦になれ其代に家屋敷。商ひの株共に親仁の跡を繼する。合點せい〳〵と道ならぬ事耳かしましく。所詮わしが死るか不具にして下されと。山上様へ願を懸たれば御利生で此病。ついに時花目の顔すれど。目は綿繰で繰様で碧いて物も云れぬ。天滿に上手の眼醫者が有ると連て御出成されし故。道すがら物語もと是迄は參りしが養生はしませぬ。私が盲目に成つたらば。兄様のひとりして店の事も取捌。内に身がすわつたら。をのづからおさは様と一ツに成氣も出來ませふ。〻わしら迄身を捨て。是程に思ふとは思ひやりも有るまい。聞へぬ所存な兄貴やと目を抱て泣ければ。供の竹が差出口。嘉平次様といふ人は虛吐のこつちやう。私にもきつう惚て居るいつぞ日の暮に出店へ來て。思ひを晴させて呉とくどかつしやる。いとしさにお使の序に寄たれば。今宵はのがれぬ客が有る重てこちから便宜せう。

心さし嬉いと銭三十程包で懐へ入れらるゝ。むつと腹が立て來てわしやてんや物じやないぞや。身を賣る女子じやないぞや。肌觸ねば聞ぬと喚いたりや。こりや誠の契りは重て。約束の印是じやと云ふて。引寄せしつぽりと頬摺して。ァいね〳〵と突出さるゝ私も名殘が惜うて。跡覗いて見たれば氣味わるそうに。店の手水鉢で頬を洗ふてけつかつたと。語れど二人は余りの事紛らす耳の余所の町。風に嵐の芝居果散し太皷の聞ゆれば。南無三寶長作が來ぬ先に。姉もいんで下されかしと飛立計の袴の中。今にも來たらば何とせう。のめ〳〵とも出られぬ首尾。出ねばぐはらりと筈違ふ。氣を揉でも詮方なく。何御存知なき天神を俄に頼む計なり。約束なれば長作暖廉の書付見て。ムヵ清水屋は是じやな。少たのも道頓堀の茶碗屋嘉平次は爰にか。約束の通り長作が來たと云ふてたも。嘉平次〳〵と云ふ聲に兄弟驚く其中にも。姉は知たる袴の中。思ひやりては諸共の心遣ひぞ殊勝なる。嵯峨聞付て走出。ァ長作様久しうごんす。嵯峨殿か。嘉平次がくるからはこなたも爰にと思ふた。我らは今日侍衆の相伴で。嵐の芝居から直に鯉屋へいく筈で。是袴の躰なれど嘉平次が何やら内々の一物。今日いらいで叶はぬ持て來て呉といふ。棧敷の事武士の前。おふとはいふたが何の事ぞ。つんと此方に覺がない。嘉平次はどこにど早う逢ふて聞たいと。云へども嵯峨は姉の前袴に共云はればこそ。いや鳥渡あそこ迄追付てござんしよ。今日いらいで叶はぬとは私も聞たが。あのさんの賣物をこなさんが取次で。屋敷方へ賣んした其銀が十何兩とやら。昨日渡る筈じやげな。請取もいつて有るとの事。大事なか私に渡さんせ。さなかまちつと酒でも飲で待んせと。いへば長作ァ〳〵だいそれた事いひますの。酒所でござらぬ。ェ、いかに身がじゆつない迚不器用な氣に成おつた。いかにも賣物は取次銀高壹貫二百三拾目代。拾六兩慥にあれに手渡しして。則自筆印判の請取を握て居る。ぢたい是は九之助橋親五兵術の棚の賣物。銀は己が遣ふて親の手前の算用立す。此長作を横道者にせうとは底意のこいい盗人。此物騒の世の中こなたの所も裏は野じや。内の勝手は知ている必用心さつしやれ。身があつければどのよな事。仕やうもしれぬと眞顔の云分。嵯峨ははつと色違ひ。兄弟は猶身にかゝる難義を察して袴の中。嚇とせきあげ身をもがきゝ、無念やかたられた。姉の手前が恥かしひいつそかけ出。踏で腹をいよふか出ては姉の恥辱か。早ふ歸つて下されかしと千萬碎く氣の働。胸の吹子にいかりの火炎。袴もゆらめく計なり。長作袴

には氣も付ず。是さが殿驚く事ではない。ぢたいあの氣な生れ付。夫を知ずに仇惚して此長作は捨られた。むごいぞや〳〵。なんと元へ戻しておれが念比してやろふか。嘉平次などゝは違ふた十貫目や十五貫目は。手の惡い事せずに見んと今でも〳〵じや。こなたも惡かろ筈がないとしなだれ寄て手を取れば。ア、いや〳〵なめ過たおかんせ。あれ町の御内義樣も見てごでる。勤の者はあんな者かとさげしみが恥しい。譬平樣が盗人で有ふが强盗で有ふが。いとしうて〳〵命をやつた此さがじや。なんぼこなたが佛程正直でも顏も見たふないわいの。ア、先一旦そういはねば譯が立ぬ。夫もこちに合點じや。今に嘉平次が大盗人仕居て。一ッ屋の五兵衛鹽町の姉が首にも繩付。其身は此方の裏の西の方に。鳥のとまつた樣に首計に成た時。長作樣念比仕樣と言ふより。今思ひ切たればあいつも仕合此方も德。どれまへの樣にむつちりと肥てか嘉平次めが吸取たか。肌を見たいと懷へ手を入る丶。取て突除てみともないおかつしやれ。言惡けれど此嵯峨と。平樣とは一心づくで逢て居る。此方の樣な口先ではないぞやと。おろ〳〵涙の腹立聲。嘉平次はもう是迄堪忍袋も破れかぶれ。飛で出んとする所へ。姉の内より迎の丁兒大息繼で申お名樣。ちやつとお歸り成れ

ませ。早ふ呼でこいと旦那樣は門に出て。待てござります早う〳〵と急かくる。ア、心元ないけたたましい何事が起た。こりや爰はくがいじやぞ誰も人の名は云ず。樣子斗ちやつと言掛て人の名を云ふなと。心のきいたる姉の利發。遣はる丶丁兒も氣轉者。角屋敷の親仁樣がお出成されて。彼板圍の惣領殿が一昨日から有所が知ず付屆借錢乞。親仁樣も一分立ぬお前の留主も合點がいかぬ。兄弟の事成れは眼醫者にかこつけ惣領殿を。かくまへたに極つた姉も共に勘當じやと。わめき散してござりました。夫で走て來ました、づゝなやと息を繼。ア、そんならいなざ成まい。いかひで叶はぬ所も有り。見捨難ない事もあれど。男も女子も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼使。ア、女郎樣お邪魔しましたとけがのふりにて駕にはつと行當り。ア、駕が有るとは氣が付なんだ。是に限らず狼狽ては鼻の先な事に氣が付ぬ事が多ひ。商物の請取なら買主の手へ渡りそうな物が。中使の手に握て居るとはの。是も氣の付ぬ事と。敎るちゑや天神を伏拜てゞ歸りける。嘉平次憚る方もなく駕踏散し踊出。長作がたゞさ取てひつすへ。此嘉平次を盗人の騙人のとはどの顋頰で吐いた。先は武家方中取したと思はれては出入がならぬ。先請取書て渡せ銀取てやらふと。うま〳〵よふ喰せ

たなあ。今のは身が姉じや人。駕に居るのも見付てじや。姉の前でよう恥を與へた。人が
と思ふてはまつた。涙が溢れて口惜いと齒がみをなして泣居たり。ナ、成程姉とは一言で見
て取た。買主の方へいくべき手形が中に留つて有ろとは。なんじや女の猿ぢゐ。先へは此長
作が請取して上たあれは身が方への請取。汝もせちがな奴じや者。銀も見ずにあたゝかに
請取をせうわいなあ。ニ、さもしい騙子め。ヤ銀が欲くばきたない云懸せうより。奇麗に家
尻きれいやい。扨もたくんだ〳〵今思ひ當た。嵐の芝居の曾根崎の狂言が。面白ふて再々
見ると吐したがよふ見覺へた。取もなをさず油屋の九平次。惣じて狂言淨瑠理は善惡人の
鏡になる。已はかたりの手本にするか。師匠の九平次より倍越た大がたり。此春己に三百
目銀借た。念比の中手形も入ぬと吐したれど。よい中の垣と預り證文して遣た。夫に引繼
合點なら差引して算用せい。こりや油屋の九平次。醤油屋の徳兵衛を。だました格を出し
たらば些と腮を喰違よふ。ちよつと手を付るが最期じやぞ長作と。腕まくりしてねぢよれ
ば。ナアひこ〳〵するない。わやにしてもさせぬ〳〵。手形の銀は手形の通り取る所で取て
見しよ。ナ、三百目の手形に拾六兩は得遣まい。遣まいとはどうして。先からして遣まいと

めつこうはうど打はずる。ナニ才め擲れて居ようかとぶちかくる。腕ねぢ揚ひつくり返せ
ば起上り。武者ぶり付て擲き合ふ。さがはあせつてなふ喧嘩〳〵と呼はる聲。客も駕も醉
つぶれさせぬ〳〵と割込で。ひよろつく足を蹈こかされ。さへ人蹈んだは堪忍せぬと。相
手がどれやらめつたぶち。大道へまくり出大盡も泥まぶれ。駕の者もちんば引。嵯峨は嘉平
次かこはんと身を捨て悪廻る。わめく人聲雨の音瀧を流すに異成らず。祝子宮奴棒突き散
し。社内の騒狼籍千萬出よ〳〵と制すれば。どやくや紛れに長作は行方なく逃失たり。茶
屋は思はぬ蹈立早日も暮た御門が閉る。お客様も早お立嵯峨様は大事の身。駕の衆早う乘
ていなつしやれ。お客様も笠貸ましよか。但お駕借ましよか。いや〳〵駕は錢が出る。唯
貸笠を借ぬが損嵯峨は夜蓑身共が揚。道の間も算用の内。駕に付て歸らふと跣足に成て出
ければ。嵯峨は心も暗紛れ。何としてじやどこにじやと見廻せばナ、悲し。平は鬢も掻亂れ
亂るゝ雨の藤の蔭。濡て立たるあぢきなさ勤迚口惜い。大事の男をぶち擲かせ。濡しはる
ゝを見て居ながら我身は駕に乘る事か。ニ、儘ならば飛下て共に抱てもぬれう物と。見やれ
ば男も目を合せ。憧る中の愛涙いとゞ雨こそしきりなれ。なふ駕の衆先待てや。わしや此

といが鬱陶い。身は濡ても厭ぬ。是を爰に捨置て俄に雨にあふた人。着て下されば本望。是は嵯峨が囃ふたと手を上て引絞り。たゝんでひらりと捨ければ。平は立寄り拾い取押戴きて雨に着る。田簑の島の寡づる。鳴てたちたる哀さに。ァ、忝ない誰かは知ねどよふ拾ふて着てくだんす。私も其下に暫が程の雨宿り。こなさんも其通り其雨どゐを一樹の蔭。他生の縁でござんすと。徳は見かへる嘉平次は見送る中に降る涙。つれなや神の梅の雨降へだてゝぞ別れ行く。

中之巻

こゝろ〳〵の。商も皆世渡りの大和橋。下行水の淡よりも色にぞ銀は消安く。際は素焼の明徳利けふの高浦の節句にも。店指身皿とや角と。人も火入や灰吹も碎て物や思ふらん。繁昌の地の紋日さへ更て淋しき五月闇。徳の者共灯燈提嘉平次が店破る計に叩け共。誰と咎むる人けもなくしきりに叩けば家主。紺屋の若い者共大欠して出合。誰じややかまし。一年に一度の五月の節句我人皆休んで居る。嘉平次殿は晦日前から爰には居られぬ。二日の晩方鳥渡戻つて夫から彫も見せられぬ。懸乞衆なら夕部乞たがよいわいの。節句しも何事ぞ。物じてそこは出店で火を焼事も御法度。母屋は松屋町九の助橋の角。一ッ屋の五兵衛殿隠れはない。いや懸乞ではござらぬ。伏見坂町柏屋の嵯峨と申が。是も二日の夜から見へませぬ。けふで四日様〳〵にしても知れませず。こんな所によもやとは存乍嘉平次様とは深い中。念の爲でござると云ふ所へ利窟くさい白髪交り。嘉平次殿はまだでござるか歸られたら云ふて下され。西國橋印傅屋長作から參つた。手形の銀子不埒に就て。明後日お願ひ申升と。ァ、聞に及ばぬ爰は出店の棚貸。何事も存せぬ本宅へ〳〵と。取合ねば詮方なく皆東へと走りける。紺屋の者共呆れ果何と清介。此嵯峨と云ふお山見やつたか。ム、そなたは終に見ぬか。さい〳〵爰へ泊りに來た。夫れは〳〵よい女房。いかにも〳〵嵯峨の釋迦。毘首羯磨の御作と云ふてもだんないと。云へば一人がうなづいて。夫で聞へた嘉平次の。借錢だんと打笑ひ。締る門口深々と川音更て静なり。世の中に。あき果よとて付し名か。今は身にさへ秋のさが。平と二人が二日の夜身の憂儘にふつと出て。どこをとぼ〳〵行先の當もない徳かりの世に。死ねば成ぬ信濃紬の糸よりも。心が細く氣も弱く廣い國を也我と我。心で狭く住なせし日本橋にぞ着にける。なふ平様どれ顔見せさんせ。いとしや

漸々に氣がくらうならんす。どう思ふてぞいの其樣にうか〳〵と。唐高麗を歩いた迚。壹貫目と登つた銀降湧ふ苦もなし。其中人に見付られ見苦しひ目に逢ふ時。難波燒の嘉平次が死でも除す。茶屋の銀負ふてあのざま見よと云れた時。此比天滿で姉ごさんのおしやんす通り。御一門迄顏よごし迚も生ぬ覺悟の上。早う死なふじや有るまいか。ア、思へば姉ごさん。こなさんを大切にいとしそうなお詞。嵯峨と云ふ名は聞てなり大事の弟を先度の叔が。殺しおつたか恨めしいと惡みを請うが悲しいと。手に取付て泣ければ。ナ、今宵は延さぬ合點なれど先そつと出店へいて。小刀でも用意し我宿と名付けた出店の門口。夫婦手を取り最期の門出する心。嬉しや通りの人にも逢なんだ。アはいりやと戸を押て南無三寶。つい引樞さいて出たれば。親仁からか家主からか門に錠を卸した。ハアこりやかう有る筈と傍を尋くり石拾ひ。力に任せしやん〳〵。しやん〳〵〳〵と打撒き傍は深〳〵遠音のこだま。紺屋に聞付すは盗人よ桿棒よ灯燈と。若い者共駈出る音。嵯峨を後に羽織の下。裾をかゞきのわまならで人の見る目も覺束な。ナ嘉平次殿。此中はどうじや。際の日に商人の店を捨て何所へぬつくりはいつてぞ。書出しやら悪乞やら今宵迄も尋て來る。返答にもこまつた、分の惡ひお人ぢやなふ。尤々。京の清水燒にすんど安い仕廻物が有ると聞。人に先を越れまいと俄に登つて漸々今朝下つた。日比やだの有る此嘉平次。嘸逃た走つたと評判でござらふ。親仁も商ひに精出す迚いつにない機嫌で。今夜は出店に泊れと云はるゝ。どこも首尾に成ました。家主殿の錠そうなアー鍵が有るなら明て下され。迚もの事に火も囉はふ行燈に燈して下され。何かど皆の御苦勞。其代に今度の清水燒には利が有る。わつさりと振舞とさがを圍ふて身をそむけ。此期に成つても口利口後を見せぬは兵なり。其間に錠明て是火も燈し付ました。茶でも所望にでざらぬかと表へ出れば嘉平次は。跡しやうりして入替り。最休んで下され明日お目に懸らふ。いかふ眠たい寢ますると。磕とさして內より懸金しやんと〆れば。嵯峨は溜息身を振はし。早ふ死で除たいと呟くも只涙なり。表には猶不審を立小脇に打寄。今夜の歸り合點がいかぬ。云分と云ひ呑込ぬ清介は親御に此樣子知せておじや。まつかせと駈出すこちも是で二度起た。ま一度起るは定の物と謹さ內に入にけり。嘉平次表に氣を付ア向ひの門も締つた。是迄こそ太儀なれ。どこに何の障もなし。二人から双ば夫婦住居し同前なり。是爰がそなたの內じやぞや。ヱ、口惜い世間廣ふ內へい

れ。親にも逢せ町へも弘めそなたに世帶を打任せ商ひも仕廣げ。嘉平次が女房は勤の者の風はない。何程の大世帶も捌き兼まい女房じやと。いはせうと思ふたに叶はぬ事は叶はぬもの。たつた纔か壹貫目餘りの。銀の瀬戸を越兼て浮名を取て死ぬる事。無念なはいのと齒ぎしみし頭も上ず泣ければ。さればいの私迚も。一日なりと父御樣に御奉公。姉御樣を姑御と宮仕せう物と。明暮の願ひ事叶はぬのみか此しだら。及ぬ願のさか罰か。此前去人に三世相見て囉ひしに。先生で佛前の。茶湯の茶碗打割し報ひ有り。愼めとの物語今思ひ合すれば。こなさんの此商買を打破つて身を果す。茶湯の茶碗打割し。因果が回り來ましたと又伏沈み泣居たり。ハテ斯なる身の三世相祿な事が有る物か。夜中も過たいざおじやと既に出んとする所へ。嘉平次用が有る爰明いと門叩く。誰じや夜更て濟い。用が有らば其所から云。たはけ者親の聲を知らぬか。五兵衛じや明い。はつと云ふより仰頓したつた一間の濱納屋を。嵯峨が素振も見せともなし。どこに隱さん道成寺の鐘はなけれど即座の知惠。窓の貫に帶を屹と結びさげ。サア取付てぶら下れと共に手を懸つ丶井筒。井筒に有らぬ釣瓶をろし。干潟の沼を踏足も淵に沈むが如なり。左有らぬ顏にて只今臥る折から。何事の御用がなと門の戸明れば親五兵衛。常に數寄の大脇差遠慮せずにこちおじやと。手を引入る丶は養ひ嫁のお際。思ひ懸なき嘉平次こりや何事が起た。嵯峨が嘸悲かろと。挨拶も何するやら聲もうはもる計なり。お際は道々泣たる顏親も涙を目に一杯。ィうつけめ。已商人の又しては〳〵。店を明て余所歩行晦日前物際は。武士の軍の虎口ぞい。後の廿八日より出店を出。朔日は天滿にて阿房をさらし。大事の五月の節季を捨今日迄はどこに居た。たつた今家主より知らされし。清水燒の仕廻物買に京へ登つて今朝歸り。親仁も機嫌がよいとは。五日にも十日にも親に顏をいつ見せた。嵯峨とやらが顏さへ見れば親の顏も兄弟の顏も。已れは見たふ有るまい。鹽町の姉が禮に來て親子兄弟菖蒲の盃する迚。今日の節句は嘉平次の顏が見へぬと汝が事悔んで。可愛や泣て歸つた。去乍こりや。此のお際が顏計は否でも應でも一期見せねば叶はぬと。云ばお際はわつと泣。ェ、情ない嘉平次樣。嫌なもの私が無理に添ふと云ふにこそ。お前の心が不定で外を家に成る丶故。親仁樣の御苦勞一ッ屋の家も立ませぬ。心さへすはつて家を踏へる覺悟なら。お嵯峨さまを呼入れて兎角お身の立つ樣に。わしや在所へ戻つて。尼になりとも成ますると道を正して泣ければ。

嵯峨は聞より氣も亂れいとしやあのお人も。心の内は嫉しかろ。わしが離るゝ事も否父御のも尤なり。ェ、死に樣が遲かつた今汐がさいて來て。此身を取てもいけかしと。身を悶へて憧るゝ嘉平次は只何事も親の慈悲。御免とよりは一言も泣てうつむく計なり。五兵衛大きに腹を立。何事も親の慈悲とは。扨は此親は慈悲を知ぬと思ふよな。ァ、慈悲知ぬ。慈悲しらぬ親持たが不肖。此お際にも親が有る。己と夫婦の約束で人の娘を囉ふて。こつちの息子が合點せぬそつちの娘を返すと。寥々と戻して一ッ屋の五兵衛が世間へ顔が出されうか。親に恥を與へる子に慈悲とはどこへ。ェ、淺ましい根性。二本指を侍一本指ば町人と斗思ふからつけ者。大小は此胸に有る。武士に劣らぬ五兵衛とけふ迄人に笑はれぬ。其世悴がどしやう骨茶屋の銀負て逃隱れ。死でも恥が拔はせぬ。己が身はすたつても此五兵衛は立通す。此お際と夫婦になれ。ァどうじや。サァ否か應かの返事せい。否と云ふと此脇指こりや。ヘァびつくりすな己は切ぬ人も切ぬ。お際が母は身が姉爺は他人。お際を婆にする替り身が腹に突込で。一ッ屋の五兵衛が一分立て見せう。サァ返事。サァ何と、拔懸て責つくる。お際は柄に取付て伯父樣殺す事はない。わたしが死ば十方がすみますと。縋り止めて泣叫ぶ。嵯峨が悲しさ身に迫り。死にては爰に只ひとり父御前の目の前で。死で見せんと涙の帶。たぐり取付登ん〳〵と心斗に力なく。足は泥に引締り帶は中よりふつゝと切れ。芦邊にどうと落水と共に涙ぞ流行く。迚も死身の嘉平次親の心を休むるは。安い事〳〵是一生の孝行納と覗念し。ァ、誤り入て御尤。若氣の至り云交せしを捨難く。今迄お心背きしは不調法。是より魂入替御意を背かず。何にもお際と祝言と。云へども嵯峨は心を知ず誠と聞て恨やせん。死際迄僞る事親を欺すか勿體なやと。思へば堰あげ聲吃り云さしてこそ泣居たれ。いや〳〵今迄幾度かたらされた。其心底に極つた證據が見たい。ヘァ證據迚何と致そうぞ。ァ、證據には今宵直にこちへ來て。祝言の盃せい。夫は余りな親仁樣。申交した女にも得と合點させ。何所も首尾よふ埒明た證據。明六日の晝迄待て下されと云へば。親も打點頭尤々。然ば祝言は其上。姉も呼寄せ一家集り盃せう。只今心の定まつた印の盃。一ッ呑で身にさせ。否出店で終に酒飲ず酒迚はござらぬ。ァ、そう有ふと思ふて酒は身が持參したと。羽織の下より一升入の秘藏の瓢簞取出し。ァ親の酌一ッ呑。あつと云ふより素燒の盃取出す。否々小さい汝が飲は知つて居る。鉢でも茶碗でも大きな物で一ッ呑。さのみ深ふはた

べませぬ。どれか是かと茶碗尋る其音を。聞にも嵯峨が袖しぼる露の萩焼大皿出し。蓋外
仔と受ければてうど飲と。瓢箪傾け繊懸る酒にはあらぬ麹の色。花の壹歩のから〳〵〳〵。
さら〳〵〳〵と七八十。皿堆く盛あぐる子は憫れうつかりと。親の顔のみ打守れば。親は
わつと聲を上。やれ慈悲知ぬ親の酒を見よ。誠の慈悲の味はひを呑てしれやと泣ければ。
ア有難しと計にて。親の膝に打もたれ。聲も惜まず歎しは性は善なる涕なり。包むに余る
親心不便や可愛や此春より。狼狽る躰を見て。此酒一献飲せたく幾度か思ひ寄たれど。否
〳〵氣の定らぬ間は却て毒酒と扣たり。此酒飲で方々の恥辱を雪ぎ無明の酒の酔醒ませ。
身共は年寄氣じやうにて病と云ふ事知ね共。五六日は己故胸も痛んで不食する。兎角人の
親には病となるも子の心。薬となるも子の心。今宵の異見を聞入て。彌心を持直し親の薬
と成てくれ。長生したいと思はね共。切て卅二三迄得くと見立。人に成して死ば楽じやと
咽返り。成人の子を引寄せて。脊中を撫て泣くどく親の心ぞ哀なる。嘉平次も人々の心の
中を思ひやり。一言も無差うつむき。落る涕は盃の是もうへこす計なり。お際も涕にくれ
乍晦日の夜から夕遊迄。案じて一目もおよらずお心疲お身の毒。歸つてお休み成されませ。
ア、歸らふ是嘉平次。此脇指は死た母と身共が祝言の時。錠引出物として別より囉ひ。枕元の
守刀と爲たる故家内に何の怪我もないぞろんのよい脇指今宵は身共がお際が親に成替り。
聟引出に取すると仇とはしらぬ凡夫心。ア今宵こそ早歸つて明日の晝迄緩りと寢よふ。や
い嘉平次呼明次第起にこい明日顔見よう。さらば〳〵と立出る。さらばは誠のさらばにて
明日見る顔は死に顔の。生顔見るは親と子の是ぞ此世の別れなる。嘉平次は親の影隠る、
斗見送て。内に駈入り窓の下視けば嵯峨は消入ばかり。泣しみづいて音もせず。是々萬事
皆聞ていわろ添いと云はふか。悲しい事と云はふか是で結句嘉平次が。親の冥加に盡るわ
いの。否々そりやこなさんの不孝と云ふもの。今の酒とは銀そうな。どこも首尾よふ仕
廻ふてお際様と夫婦に成。親御の心を悦ばせて下さんせ。私獨り死ぬれば濟。どの道から
どう云ふても。只こなさんがいとしい悪ふ聞て下んすなと。眞實見へたる涕の躰。ア、獨り
死なせてよい物か。囉ふた壹歩は百斗銀さへあれば何談合も仕安い。譬どふなれば迚其方
を捨て。お際と添ふ氣は微塵もない南無三帯が切れたか。表から廻つておじや。勝手しる
まい連にいかふと表を明て出る所に。印でんやの長作究竟の者連て。ア嘉平次。親五兵衛

は爰にじやげな逢たい〳〵。譯もない長作何時じやと思ふ。親仁が爰へいつわせた事が有る。用が有らば明日なりと明後日なりと。松屋町へいて逢へ歸れ〳〵と押出す。是何とする親仁に逢もそちが用。内々の平形の銀子不埒故。明後日お願申と斷に越たれば。松屋町へいけと有る夫故自身いつたれば。親仁は是へわせたと有る千も萬も入ぬ。銀戻すか戻さぬかと無躰に内に入ければ。嘉平次先へ懸込で壹歩を隱さん〳〵と。皿の上に中蹲踞前打合せ合せても。膝の合より顯るゝ金は金にて銀ならず。ヤ嘉平次見事な。町人は神佛共主君共。額に戴く壹歩を股に挾で股が冷よふ。さ程澤山な壹歩を戻すまいとはそりやわやじや。奇麗にしやんと渡せ〳〵。コリヤ長作拾六兩唯しられ夫がぞもとに嘉平次が。狼狽始め命沙汰に及んだ。お願ひ申さば申上仔細の有る此壹歩。粉に叩れてもやる事成ぬ。此長作が粉に叩れても取て見せう。ヤアしやら臭い常々の嘉平次とは違ふた。口廣ひ事云ふと思ふな。命を先へ出して置て取て見よ。ヤ、取て見せうと。掴み付く手をひんずと取り。店の小角へはつたと投付る。起上つて組付をまつかせと引抱へ。上に成下に成店の燒物皿茶碗。花入こ微塵五重の塔西行法師も痛手を負。ちやぼの雞飛でちりけづめに蹴られて長作が。

轉ぶ所をどうと乘り。備前鉢にて天窓の鉢叩たか〳〵と。打碎かれて錦手の。目鼻血みどろちんがいに嘉平次の生盜人。出あへ〳〵と呼はつて闇に紛れて逃失せけり。ヱ、嬉しや〳〵。一期の本望とげたぞ。親の御恩の壹歩を己にのめ〳〵取れふかと。見れ共〳〵皿打明て壹歩はなし。ヤ、今のどやくやに同道めが掴で走つた。ヤア嘉平次死物狂ひ一寸もやらふかと。囉ひし脇指ぼつこんで懸出んとする所に。紺屋の手代若者どや〳〵と門口に。嘉平次殿余りな。偶歸つて何事仕出す。兎角評議は明日一足も出させぬと。外より門口はつたと締夜明迄張番と。棒突並ていごかせず。譯を聞て下されと斷つても詫ても。斷り立ねば男も立ず。一分立ねば壹歩もなし。死ね〳〵と來る死神の引手は爰ぞと窓の子を。踏へてひらりと飛所を涕の袖にひつたりと。抱留てどふぞいの。どうとは死ぬるばつかり足音しやんな泣聲すなと。身より余りて涕川堰も止めよ岩をこし。番は閻魔ぐしやう神。紺屋のもがり釼の山。先には死出の大和橋。踏むは三途の泥の海迷ひてがれて

下之卷　嘉平次おさが道行

南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛なむあみだ〳〵。なむあみだ〳〵。南無阿彌陀佛南無阿彌

陀〳〵。南無阿彌陀佛を頼みても。西を後に歩み行く極樂淨土に背く共。利劔即是と聞く時は死する及も彌陀の縁。南無阿彌陀佛の聲細く。心細さや來世迄。かう手を引て行く事か。若や離れはせまいかと。引合し手を引寄せて。猶抱〳〵て泣盡す。今日の祝の菖蒲の露も。我が袖には憂わしや愁や端午の紙幟。神にも世にも捨られて菖蒲刀の切先に。かゝる契りの惡縁と。返らぬ道を辿り行く。涙の雨に星消て可愛ひそなたいとしい殿御。顏も見せぬか五月闇。命も世をも我身をも今一時に堀詰の。あれ井戸にも女夫有はひの。そちも妹背は替らねどこちは釣瓶の縄切れて。横に切れ行く道筋の。是六道の新道と。花屋が辻にしよんぼりと。憂數々を今宵しも數へ盡して下寺町の。後夜の響も身にしみ〴〵と。今ぞ二人が一生の夢の寢覺を松屋町。是が父御の通りかや我が生れも此筋の。親兄弟も此身とは。しらで夢をや結ぶらん。結び留ても止らぬは。わしが人玉生玉坂の。草に痩るゝ白露をあこがれ出る玉か迚。拾へば消る初螢夜るは思ひに燃れ共。晝は名におふ遊山所の。貴賤群集の伊達盡し人をいさめの藝盡し。茶やが端屋の軒續き。竹の柱に節込し。稽古淨るり太平記。琴の連歌引替て松にはげしき雨風や。我は初音か時鳥。迷土の友と鳴連て。

いとゝ恙るゝ袂かな。夫覺へてか此春の。花の紋日を此床で二人寢覺の小盃。そなたまゝ一ツおれ一ツさわる手元に萬歳が。おいも興ある相の山。花は散ても根に返る。人は返らぬ死出の山。死して返らぬ道ぞとは。今の憂身を謠ひしか。三途の瀨戸の燒物盡し。親は堅手の茶碗と茶碗。我疵付て我と我名をや流さん耻しの。我が噂も明日よりは歌祭文を身の上に。坂町邊のな通り筋。柏屋内にお嵯峨とて。年は廿の。イ花盛り。客衆〳〵の揚づめを。貸すの囉ふの暇無き愁ひ勤の中に扨。深い願ひは一ツ屋の。嘉平次故に身をはめて。替るまいとの七枚起請。書て二人が取替す。小指の血汐杉原に押て心をみかさもり。衛士の燒火と品替るかの小林が舞扇。是も浮世の形見こそ今は仇なれ松風や。無常の風も立騒ぐ辨財天の鰐口の。鰐の口より恐ろしき。追手の聲のあれ〳〵〳〵。おはへて爰に北向の。八幡宮の燈明もおのれとしめり行く先は。罪業の程思はれて呵責恐し鬼踊りの。寺の藪垣物淒く。身を振はしてぞ立にけり。嵯峨は涙にもさやらず。のふ夜明に間も有るまいが。何處で死なふと思ふてぞ。ヲ、馬場先の松原を最期場と心ざし。來事は來たがこれ見や。星さへ一つない雨空。たとひ奇麗に死んだり共。血汐の體を雨にうたれ。むさい穢ない死に顏

と笑はるゝも口惜しい。此茶店を最期場に極めんと。羽織打敷座を組ば共に寄り添ふ床の上。ヤア今が最期ぞや。臨終の一念は無量劫を引と云ふ。何んにも心に懸らぬの。ア、くどい事。思ひよふたこなさんと一所に死ぬる私じやもの。浮世の本望遂たれば。思ふ事も悔む事も露程もないわいのと。云へば平は猶泣出し。そこを云はふと云ふ事。今死ぬる今迄も我は親の顔を見る。親兄弟の事斗云ひ續けて我は死ぬるぞや。そなたも父母持た身けふが日の最期迄。父共母共云出さぬは我に未練を見せまい爲。嗜み深いそなたじやと思ふて涙が溢るゝと。語れば嵯峨はわつと泣き。忘れていたものひよんな事母様懐うござんすと。男にひたと取付て聲の下行涙の流れ。袂に溜る哀さよ。ヤ、でかしやつた云ふて仕廻ふは懺悔の一ッ。罪を助かる種ともなる。ヤア夫婦が親の事云ふ其詞を冥途の引導。一時も急がんと氷の刃すらりと抜。既に血汐と鹽町の畠づたひにあれ誰やら。南無三寶見知の有る柏屋の灯燈。ヤア寸善尺魔いかゞはせんと狼狽ゆる。嵯峨は實く茶店の圍ひ葭簀廣げてぐる〳〵ぐる。平もぐる〳〵ぐる〳〵卷に。二人簀卷の妹背川。流れの智恵も才覺も今宵限りの憂身かな。親方柏屋半兵衛小辨諸共方々と尋ね兼。ヱ、下主の智恵は跡から。紋付の灯燈で尋ぬるは無分別。嘸小辨もしんろかろ己もくわをぬかした。爰で暫く休まふと蠟燭消て立寄るも。同じ茶店の床の上夫と知ぬゞ是非も無き。小辨しくしく泣出し尤惜や嵯峨さんどふしてゞ。傍輩と云姉女郎本の姉さん妹と。兄弟の契約してあのさん便りに勤たに。若心中なゞ仕て死なんしたら私や木から落た猿。親方さん頼みます。早ふ尋て下さんせと縋り付て泣ければ。ヲ、優しい事よう云ふた。親方の身に成つて見い。可愛計か嵯峨が死ぬると大きなたをれ。年の廻り合せで損するも有る事。夫は絲瓜共思はぬが。聞へぬは嘉平次。此半兵衛を男で無と思ふたか。嵯峨を連て退手間でおれが内へ駈込。まつこう〳〵した首尾で死なねばならぬ難儀。男と見懸て頼むとたつた一言云ふて見い。人にも知られた柏屋の半兵衛。否知ぬと云はふか。ほんにやれ〳〵家財賣ても救ふ心底。胸の扉に鍵がなふて無念なはい。ア、是も跡へん今云ふて返らぬ事。さあ小辨。中寺町から藤の棚。ま一偏尋ふと云ふ所へ西東より大勢連。あの茶店に泣く聲は嵯峨と嘉平次。ヤア仕てやつたぬかるなとばら〳〵と立懸り。半兵衛小辨にむさぼり付。死なば嘉平次獨り死ね。大事の奉公人ようと殺さうと仕たなあと。髪取るやら引張やら灯燈上て顔と顔。ヤア半兵衛でないか。町の衆か。

ェ、優長な人に世話をやかす事じやないわい。嵯峨が事を仕出せば損と云ひ大きな町の騒じやァたて〳〵いかい皆の苦勞じや。草臥た上に小辨がめろ〳〵泣ので。共に氣が落て來て少爰で休んだ。どふでこいつら死のふはいい。つんと足が進まぬと歸る柏屋止る柏。命枯葉の夜嵐に又東西へぞ別れける。人影なければ嘉平次も。嵯峨も葭づほどいて溜息つき。今の を聞てか聞やつたか。半兵衛が情の詞ェ、男じや過分な。小辨が優い心ざし。添いと嬉しいと。胸に餘れば聲にもる二人が歎ぞ至極なる。ァ、何のかのと隙ぞる程涙の種。ァ今じや念佛申しやと引寄すれば。嵯峨はわつと泣出しまちつと〳〵。まあ待て下されと前後不覺に取亂す。待て呉れとは命が惜うなつて來たか。ァ、今になつて愛想づかし云ふて下す。命惜いはどなら高で身をうつ事もない。逢初めてけふが日迄鳥の啼ぬ日はあれど。顔見ぬ日もなかつたに。死ぬる今夜に限て顔さへ見へぬ雨空。未來の暗さが思はれて夫が悲しうござんすと。歎けば男も涙ぐみ。ァ、道理我迄も今生の名殘。ま、一度顔も見たけれど。燈迄は夏草にせめて螢の影でもほしい。ァ、思ひ當りしと小石拾ふて脇指の。鍔を火打の石の火の光り待つ間の命の樂しみ。下緒の房のしげ糸を。はくちとなしてかち〳〵。かつしと打て吹付る。火影も息も幽かにて互に見替す顔と顔。永い別れに成たかとわつと計りに縋付。大聲上て歎しは理り責て哀れなり。既に明行く烏の聲。泣〳〵胸を押廣げ。ァ何にも思ふ事は無い。ァ、でかした〳〵と拔たる脇指取直し。南無阿彌陀佛と差通せば。うんと非りのり返るぐつとゑぐれば手足をもがき。又差通せば身を悶へ。ゑぐりくり〳〵目も眩めき婆婆に出る息絶果て。終に冥土に引入たる敢なき最期ぞ哀なる。死骸を繕ひ血刀よつく押拭ひ。同じ刄と思へ共守にせよとの親の讓り。此刄に死するは最期の不孝。二世迄夫婦抱帶。契りは先の世〳〵迄も重ぬる床の竹すがき。死顔見せじと押包む羽織も空も黑羽二重。床凭をがばと踏はづせば。色も變じて目眩き忽息は絶てける。惜や五日の花菖蒲花の骸を血に染て。戀の刄に伏見坂の世話りとこそなりにけり。

生玉心中終

吉子保六年七月十五日初興行、作者六十九歳

女殺油地獄

近松門左衛門 作

船は新造の乗り心ヨイヨエ。君と我と我と君とは。圖に乗つた乗つて來た。しつとんとん〳〵しとん〳〵。しつとゝ逢せの波枕。杯は何處いた。君が杯いつも飲たや武野の。月の。月の夜すがら戯れ遊べ。囃し立てたる大騒ぎ。北の新地の料理茶屋。主人なけれど咲花や。後家のおかめが請こんで。客の變名は郎九とて生れは陸奥會津にて。名代ながさぬ金遣ひ。此頃浪華此里へ。登りつめたよ天王寺屋。小菊を思ひ思はれたさに。なまづ川よりゆら〳〵と。野崎參りの屋形船。卯月中旬のはつあつさ。末の閏に追繰て。未だ肌寒き川風を。酒に凌ぎてそゝ〻行。しやくざいれうせん妙法華。金際西方妙阿彌陀。娑婆示現觀世音。三世の利益三年續き。去々年戊亥の春は。うらやせどやに罪深く。針櫛箱や珠數袋。そこに日の目も見ず知らぬ。一文不通の衆生迄。千手の御手の攫み取り。紫摩黄金の御肌に忽ち那智の觀世音。去年は和州法隆寺。聖徳太子の千百年忌。これ又くせの大悲の化身。續いて今年此薩埵。櫻過にし山里の。誰れ訪べくも無かりしに。老若男女の花咲きて。足をそら〳〵空吹風に。散らぬ色香の伊達參り。大人童も歌ふを聞ば。行もちんつ歸るもちん

つ。又來る人もちんつちりつて。チリチッテ次手を頼みの乘合船は。借切よりも得花堤共に舳を漕付て。他所も一つの船の中。客は是見よ顔自慢。動ともすれば痴話ごとの。夫に任せた身の上へも。人も耻かし氣詰りと。小菊は陸へ一飛に。ひらりぽうしのふかゞと。眉は隱せどとりなりの。町で名古屋の胸高帶は。小笹に露のたまられぬ。儉約算用世智辨も。人にこそよれ品にこそ。よれつもつれつ道草に。人の言草ア、むつかしく。うるさく憎く嫌らしく。我が供船を小手招き。是の見さんせナ愛宕の山に。ヨヨ。ぢんの煙が三筋立つ。四筋に別れ玉鉾の。是より辰巳奈良街道。丑寅隅は八幡道。玉造へは未申。西は元來し京橋や。野田の片町大和川。爰は名にあふ壽命の松。御代長久の岡山を。歌には忍の岡とも詠み。佐良々山口一ッ橋。渡して救ふ御願力。無量無邊のじゆふくかく。慈眼視衆生念彼觀音。身得度者の御誓。問ふも語るも行く船も。徒歩路ひろふも諸とも に。迷ひを開く腰扇。御堂に念珠を繰返へす。所をとへば本天滿町。町の幅さへ細々の。柳腰やなぎ髮とろりとせいも種油。梅花紙こしゑの油。夫は豐島屋七左衛門。妻の野崎の開張參り。姉は九ッ三人娘。抱手引手に見返る人も。子持とは見ぬ花盛り。吉野の吉の字を取つて。お吉とは誰が名付けん。お清は六ッ中娘。母樣茶々が飲たいも。折節傍の出茶屋見世。爰借りますと憩ひぬ。是も同町筋向ひ河内屋與兵衛。未だ二十三親がゝり。同商賣の色友達。刷毛の彌五郎。皆朱の善兵衛。野崎參りの三人づれ。萬事を夢と呑みあげし。寢醒提重五舛樽坊主持して北うずむ。小菊めが客と連立。よし〳〵と下向するも此筋と。のさばり返つてくる道の。茶見世の中より中々與兵衛樣。爰へ〳〵と呼懸られ。ヤお吉樣子共衆連ての參りか。存たら連に成ましよ物。七左衛門殿は留主なさるゝか。いや此方の人も同道〳〵二三軒寄る所もあり。追付爰へ見へる筈。お連衆もマア是へ。平に〳〵と强られて。煙草一服致さうかと。腰打かくるものんこらし。何と與兵衛樣。御繁昌な參りでは無かいの。よい衆の娘子達やお家樣がた。アレ〳〵彼處へ桔梗染の腰變り。島縮の帶しやじやはひの〳〵。ソレ〳〵〳〵其處へ島縮に鹿子の帶。慥に中の風と見た。又一位見事では有るぞ。如何樣若いお衆が此樣な折に。あんな見事な者引連れ。贅の遣たいは道理。こな樣も連立たい者がある。こんな折に新地の天王寺屋小菊殿か。新町の備前屋松風殿か。なんと能知つて居るが。何故連立て參らんせぬと。ぱつと乘すればふはと乘り。殘り多い天晴今

日は物の見事なことで。參りの群衆に目を醒させうと。此中からもがいたれど。備前屋の松風めは先約が有て。貰ひも貸もならぬと吐す。天王寺屋の小菊めは。野崎へは方が惡い誰樣の御意でも參らぬと言さる。夫に聞て下され。小菊めか今日會津の客に揚られ。早天から川御座で參りおつた。田舍者に仕負ては此與兵衛が立ぬ。小菊めが歸るを待て一出入と。咄の内から二人のつれ。腕押もんで力みかけ。鬼とも組べき勢なり。それ〳〵問ふには落ず語るに落ると。利口そうに夫が信心の觀音參りか。喧嘩師ののち參り。買しやんすお山も傾城も。何やの誰何屋の誰と。親御達が能知ていとしぼや。其許は與兵衛めが間がなすきがな入浸て居る。異見して下されと。私等夫婦に折入て口說ごと。我夫の七左衛門殿もいやらぬ事は有るまい。定めしこな樣の心には。所こそおれ野がけの茶見世で。若い女子のざまで入子鉢の樣な。面々の子共の世話斗やきおらず。小さし出たと憎かろが。此諸茂人の群衆を。突のけ押のけ目に立つ風俗。本天滿町河内屋德兵衛といふ。油屋の二番息子。茶屋〳〵のわけも碌に立ず。あの樣見よと指さしするが笑止な。こうとうな兄御を手本にして。商人といふ物は。一文錢もふだにせず。雀の巣もくふにたまる。隨分稼いで親達の肩助けと。心願立さんせ。脇へは行ぬ其身のせうごん。氣に入らぬやら返事がない。姉おじや早ふ參らふ。道でこちの人に逢しやんしたら。本堂に待て居ると言て下さんせ。茶屋殿過分と。袂より置く茶の錢の八九文。四分におもく五分には。輕々し氣の物參り。別れてお吉は通りける。惡性に上塗する皆朱の善兵衛。彼の女は與兵衛が筋向の内儀樣でないかい。物でしもどこやら戀のある美しい顏で。扨々堅い女房じやな。然れば年もまだ二十七。色は有れど數の子程產廣げ。所帶染て氣がこうとう。好女房にいかひ疵。見惡斗りで美味の無い。飴細工の鳥じやと笑ひける。斯くとは如何でしろうとの。田舍の客に揚られて。連て主人の後家交り。かはりちんつの國訛り。やつしは甚左衛門幸左衛門が思案ごと。四郎三が憂い事。ちんつ〳〵ちんちりつてつて。日本一の名人樣。やつちや〳〵と譽る歌より。褒さする金ぞ諸藝の上手なる。そりや〳〵來たぞと三人が。手ぐすね引たる顏色小菊遠目にはつと驚き。申花車さん。同じ道斗氣が尽きる。始の船に乘たいと。裾かい取て立息らふ。前に與兵衛帆柱立ち。跡に二王の張番立ち。與兵衛せくな。女郎と詰開ひて男立い。會津蠟燭が光だてしたら。此方二人が心切て踏消してくれると。草履を腰に腕卷

り。客は顚倒花車も下女も狼狽。小菊を圍ふてうぞふるふ。小菊殿かつた。馴染の河與がかるからは動せぬと。茶屋の床机に引ずりすゑる。是賣女樣安お山樣。野崎は方が悪い。誰樣の御意でも參らぬと。此河與と連になるを嫌ひ。好た客と參れば方も搏ぬか。其譯聞ふと理屈ばる。目玉のきもん金神もなどやかに。河與樣角か取れぬの。小菊といふ名が一つ出れは。與兵衛といふ名は三つ出る程。深い〳〵と言立られた兩人の中。連立て參らぬも。皆なこな樣の最愛さゆへ。人にそだてられ嫉けられ何んじやの。妾が心は誓文かうじやと。ひつたり抱き寄せ染々囁く。色こそ見へね河與が悅喜。ェ添けないと伸た顏付。客は堪らず傍にどうと腰かけ。小菊どのお身は閑へぬ。如何なる縁にか會津樣はど最愛い人は。大坂中に無いと言つたぞよ。國元の外閑身の大慶と。大事の金銀を湯水の樣に川遊び。ちよがらかされにや來申さない。其男か聞まへで。夕べの如く云はないけりや。どや〳〵通りのむや〳〵の關。二度と越し申さない。どうだ〳〵と責せちがふ。言合せし二人の連つか〳〵と寄て。ャィもさめ。此女郎此方へ貰ふ置て歸れ。但東土產に川の泥水振舞はふかと。兩方より立はさみ。擲て呉んす面搏。阪東者のどう强く。何さぶい〳〵共。人嚇の腕に色々の彫物して喧嘩に事よせ。懷中の物取ると聞及ぶ。貧乏と云ふ棒に脛を叩られ。腰膝も立ぬ遊女狂ひ。上方の泥水より奥州者の泥足くらへと。つゝと寄り蹴上る足首。刷毛が顚ひ蹴ちがへられ。どうとまろんでころ〳〵。小川へだんぶと撥落され。是はと取付皆朱が大事の命の玉。縮み込程蹴付られ。爲がかけた南無三と。惘れて空をみち〳〵。腹ばい〳〵逃て行衛は無りけり。友達投させ見て居ぬ男。倒まにうへて呉れんと。ひつと握めば振放し。ャちよこざいなげさひ六。ゑら骨ひつかいて呉れべいと。くらはす拳を請除しては擲返し。敲き合ひ掴み合ふ。なふ氣の通らぬ是どうぞと。中へ小菊がかせに入り。〻怪我爲しやんすな。大事の身と花車が圍へば。下女も手を引立隔つ。そりや喧嘩よと諸人の騷ぎ。茶屋は店を仕廻ふやら。二人は絶体絶命の。擲合ひ組合ひ。堤の片岸踏み崩し。小川にどう〳〵落ちわかれ。藻屑泥土まいごみ砂。互に投げかけ掴かけ。打あい打付仲裁人無き相手勝負。氣根較べと見へにけり。折こそあらめ島上郡高槻の家の子。お小姓達の出頭小栗八彌。馬上に上下御代參の徒士若黨。揃羽織の濱梯に。智惠の輪の大紋。手振の先供はい〳〵〳〵の。聲をも聞かず與兵衛が。たぐりかけて打つ泥砂。出合拍子に馬上の武

士の。拾上下皆具迄ざつくと掛るも時の運。栗毛忽ち泥付毛はいがい鞍もしづまらず。與兵衛もはつと驚く所。それ逃すなと徒歩の衆。ばら〳〵と取まく中。相手は川を渡越し。小菊も花車も手ばしかく。參りの諸人に紛れてのく。徒士頭山本森右衛門。與兵衛が兩脛かいてぎやつとのめらせ。膝を脊骨にひしぎ付る。ァ、お侍樣。けがで御坐る御免成ませ。お慈悲〳〵と泣面かく。ャ此奴慮外者。お小袖馬具に泥をかけて。けがと云ふては濟ぬ。面を上いと首ねぢ上げ。ャァ森右衛門殿伯父じや人。ュ、與兵衛めかと。互ひにはつと驚きしが。ャィおのれは町人。如何樣の恥辱を取ても疵にならぬ。旦那より御扶持を蒙り。二字を首に懸たる森右衛門。慮外者を取て押へ。甥と見たれば猶助けられぬ。討て捨る立ませいと。小腕を取て引立る。馬上の主人。ャィ〳〵森右衛門。見れば其方が大小の鞘口。つめやうが緩さうな。ふと鞘走つて。けがでもして。血を見れば殿の御代參叶はず。歸らねばならぬ。下向迄は隨分鞘口に心を付て。森右衛門供をせい〳〵。ハァはつとお詞添なく。おのれ下向には首を討。暫の命と突はなし。隨分おぢが目に懸るなと。云ひたけれども侍氣。聲せぬ夏の手振驚はい〳〵〳〵。武家のいきかたなづまぬ御馬足を早めて急がるゝ。與兵衛

うつとり。夢か現か醉たるごとく。南無三伯父の下向に斬るゝ筈。切られたら死ふ。死たらどうしよと。心は沈み氣はうはもり。遁てくれうと駈出で。ハァから行ば野崎。大坂は何方やら方角がない。こつちは京の方。あの山は闇峠か但比叡山か。どこへいたらば遁れうと。眼も迷ひ狼狽。ァ、どうかせう何と加賀笠。お吉と見るより地獄の地藏。ャァお吉樣下向か。我や今切らるゝ助けて下され。大坂へ連れてゐて下され。後生で御座ると泣おがむ。ィャこちや未だ下向じや無はいの。七八町往れど余まり人せり。こちの人侍合せに爰迄歸た。ェ、けうとなげな。身も顔も泥だらけ。氣が違ふたか與兵衛樣。尤〳〵喧嘩して泥を攫み合。はね馬に乘た侍に其泥が懸つて。それで下向に切らるゝ筈。頼ます〳〵と立去ず。ェ、惘れはてた。親御達の病になるがいとしぼい。向ひぞしのけん〳〵共ならず。茶屋の内借て振溜いで進せましよ。顔も洗ひとつとゝ。大坂へ歸つて。以後を嗜ましやんせ。又爰かりますお清よ。父樣が見へたら。阿母に知らしやゝと。二人葦簀の奥長き。日影も正午に傾けりさぞや妻子が待らんと。辨當かたげかた〳〵に。姉の手を引豐島屋の七左衛門。咽喉が乾けど呑間も急ぐ。茶屋の前にて中娘。ァ、父樣かと縋り寄る。ァ、待兼たか。阿母は何處に

と尋れば。阿母様は爰の茶屋の内に。河内屋の與兵衛様と二人。帶解て衣服も脱てゝ御さんする。ナヲ河内屋與兵衛めと。帶といて裸体に成てじや。ニ、口惜い目を拔れた。そうして跡はどうじや〳〵。そうして鼻紙で拭ふたり洗ふたりと。聞よりせき立つ七左衛門。顔色かはり眼もすはり。門口に立はだかり。お吉も與兵衛も是へ出よ。但し出ずば其處へ踏でむと呼はる聲に。こちの人か子供がお晝の時分も忘れ。何處に何していさしやんしたと。出る跡から與兵衛が。七左衛門殿面目無い。ふとした喧嘩に泥にはまり。色々お内義様のお世話。是も七左衛門殿のお蔭。添けないといふ小髮さき。髮の髷も泥まぶれ。身は濡鼠腹立やら可笑いやら。挨拶もせず是お吉。人の世話もよい比に爲たがよい。若い女が若い男の帶といて。そうして跡で紙で拭ふとは。尾籠至極疑はしい。餘所のとはばからかして。ナヲ〳〵參らふ日がたける。ナヲ〳〵待て居ました。委い事は道すがらと。姉が手を引おとは抱く。中は爺親肩車に。のりの敎も一っは遊山。群聚をわけてゞ急ぎける。與兵衛一人茶屋の見世。茫然として居る所に。亭主を始め。近邊在所の者共五六人。先にから爰な人は參りか下向か。一っ所にうろ〳〵と。合點いかぬナヲ通つたと追立る。折からはい〳〵〳〵の。聲に交はる轡の音。小栗八彌下向の徒歩立。與兵衛うろたへ逃損い。押わる供先伯父の目に。懸るふしやうの出合頭。引捉へ捻する。最前は御參詣。今は御下向愼みなし討て捨ると。刀の柄に手をかくる。待て〳〵森右衛門。その者討て捨てんとは何故〳〵。彼奴は最前の慮外者。他人ならば少々は見遁しにも致し。御免なされ下し置るゝ樣の。取成をも申すべき所。彼奴が母は拙者が兄弟。現在の甥。何とも助け難しと申しも敢ぬに。シテ其咎といふは何ごと。御尋ねに及はず。御服に泥を投かけ。御身を穢し汚したる科。イヤ〳〵此八彌が身を汚せしとは心得ず。是見よ着類の何處に泥か付たるぞ。イヤ召換られぬ以前の御小袖。されば〳〵着換れば。泥をかゝらぬも同前では有まいか。御意とは申しながら。已に御馬の鞍鐙も泥に染み。お徒歩でお歸り成るゝは。旦那に耻辱を與ゆる。慮外者と申上れば。默れ〳〵。馬の皆具には泥のかゝる物もへに。障泥といふ字は。泥をへだつと書く。泥の懸らぬ物ならば。何しに隔つるといふ字の入るべきぞ。耻辱も慮外も咎も無し。武士たる者の耻辱とは。只一滴の濁水も。名字に懸るは洗ふにおちず。すゝぐに去らず。われら体の雜人。身が目からは泥水。泥より出て泥に染ぬ蓮の八彌。名字は汚れぬ助けてやれ。ハヲはつと。

又有難さ御意を大事に。振る手を揃へ足そろへ。行列立てゝぞ。

中之巻

掲諦〜〜。波羅掲諦。波羅僧掲諦掲諦〜〜。波羅掲諦波羅僧掲諦。おんころ〜せんだりまとうき。おんあびらうんけん。おん油屋仲間の山上講。俗体乍ら數度のお山。院號請けたる若手の先達。新きやくまじり十二とう組。吹出す法螺のかい〜しげなる金剛杖。腰に腰當首に珠數。巾着代の水のみ。河内屋徳兵衛店前に立寄り。何んと與兵衛内にか〜。講中何事なふ。お山勤めて有難い。今日の下向は知た事。念比な友達は桑津まで迎ひにじや。お主一人見へぬは氣色でも惡いか。添けない御利生見て來た。是が土産先づ話さふ。西國者とやら。兩眼つぶれた十二三な旦那が。大願かけて山上し。行者様を拜む中。兩方共にくはつと開き。おざゝの坂を杖もつかず。つゝつと下る。お山の衆が考へゝ有がたい。此秋から世の中直る御告。あれ合點いかぬか。ちいさい旦は小旦。則はち米藏開いて。やす〜と下り坂は。下り口とのおしへ手際なら夕方お出。色々お山の咄で。旅の疲をはらそうぎやてい〜と罵めさける。親徳兵衛走出。若衆下向か殊勝にござる。こちの治郎めは山上參りの行者講のと。今年も身共が手から四貫六百。順慶町の兄太兵衛から四貫。以上十貫近ひ錢取て。どれどこに迎ひにも出をらぬ。神佛の罰も思はぬどろく者。友達甲斐に引しめて。異見頼みするといふ所へ。奥より母親兩手に茶碗。なふ〜目出度下向。ヤア一ッつゝまいれ。こちの與兵衛が。山上様へ虚言ついた其咎が。妹娘のおかちが十日斗風引て枕あがらず。醫者も三人替て今に熱がさめ兼。節句は近付婿を入る談合極り。先からは急いで來る。何かに付て夫婦の苦勞。皆與兵衛ののちめが。行者様へ虚ついた祟り。お若衆お詫の祈禱頼みやすと。しみ〜語れば講中の先達。いや〜。お山の祟りなれば與兵衛に罰が當る筈。役の行者ともいはるゝ佛が。若輩らしう何の脇がゝりなされう。娘どの熱病は又外のこと。その様な煩らいには藥も醫者もいらぬ事。皆様知らずか。あんまり奇妙で。異名を白稲荷法印と申す。今の世の流行り山伏。與兵衛も定め し知つていよ。此法印を願めば。本服はたつた一加持。是から直に立寄。願ひに否は有まいと語れば悦び。ナフ〜忝ない。是も行者のおしらせ。私は醫者殿へ參ります。是で緩りとお休み〜と立出れば。いや我々も面々の親々妻子の顔も見たし。互に無事で悦びの。

貝吹く降伏惡魔を除ふ眞言の。聲も散〳〵はら〳〵ぎやてい。おんころ〳〵に別れ歸りけり。きやくな弟に似ぬ心。順慶町の兄河内屋太兵衛。用有げにも浮ぬ顏付。太兵衛來てか。おかちが氣色見廻か。書出し何か忙しい時分。見廻には及ぬ事と。いへば太兵衛傍近く寄り。母には道でお目に懸り。立ながら委う物語致せしが。高槻の伯父森右衛門樣から。たつた今飛脚の狀に。もつけな事が云ふて來ました。見さつしやれ跡の月。御主人の供して野崎參りの折節。ごくどうの與兵衛めも參り合せ。友達喧嘩に攫み合ふひやうし。御主人へ段々の慮外。當座に與兵衛めを斬殺し。ぬしも腹切合點の所。御主人の御丁見穩しく事相濟。歸つて後御家中町屋是沙汰。のめ〳〵と頬さげて奉公ならず。暇を願ひ浪人し。四五日中に大坂へ下り。二度侍の立べき思案せずば。此ぶんで刀は差れぬとの文体なりと。いふよりはつと膝を打ち。扨こそな。何處ぞで大事仕出さふと思ふつぼ。かて〻加へて。おかちが煩ひ。おぢの難義未だ此上に。治郎めが何を仕出さふやら。分別にあたはぬと頭をかけば。イヤ分別も何もいらぬ。追出して退さつしやれ。おたい親父樣が手ぬるい。私と與兵衛めは。お前の種でないとて。あまり御遠慮が過ぎまする。腹に宿つた母者人と。連

添ふお前眞實の父と存る。やがて婿を取程弁丈伸た。おかちは擲叩き成れても。あんだらめには拳一つ當すはたゐさせ。萬事に遠慮が皆身の仇。叩出して此方へこさつしやれ。どれぞ酷い主にかけ。矯直して呉ませふと。云へば親仁は無念顏。ヱ、口惜い。尤も繼父なれば迚親は親。子を折檻するに遠慮は無い筈なれど。其方衆兄弟は身共が親方の子。親旦那往生の時は。そなたが七ッのらめは四ッ。坊さま兄樣。德兵衛どうせいこふせいと。云ふたを彼奴が屹度覺へて居る。母も始はおか樣の。內儀樣のといふた人。おぢ森右衛門殿が了見で。其方が家を見棄てゝは。後家も子共も路頭に立。兎角森右衛門次第に成てくれと。だん〳〵の頼もへ。親方の內儀と此如く夫婦に成り。親方の子を我子として。守立し甲斐あつて。其方は自分の獨稼ぎもめさるゝ。與兵衛めに商賣の手を擴げさせ。手代も置き倉の壹軒も立る樣にと。わがいても尻のはどけた錢さし。籠で水汲む如く跡からぬけ。壹反まうければ百反遣ふ根性。異見一言言ひ出せば千言で言返す。ヱ、元が主筋下人筋の親と子。釘ごたへせぬ筈。身の境界が口惜いと。歯を嚙ひしばれば。ヤこなたの其正直を見透て。どろく者めが爲度甲斐に踏付る。親仁樣の蔭でこそ。親子三人橋にも寐ず。人の門にもた

丶す。名跡立て丶下された。其恩徳は本の親にも變らずと。毎度母も其悔み。子共に遠慮あるからは。現在腹に宿した母にも。氣兼が有かと思はぬ心置る丶。因果さらしの物にならずに飽果てた。太兵衛頼む江戸長崎へも追下し。死をらば死に次第。二度面も見とふない。みぢんも愛着殘らぬと。如來かけての母が言分からは。何御遠慮。勘當なされと評議の聲に目を醒し。ァ丶づ丶無ひ阿母様〳〵か丶様は未歸らずかと。おかちが苦しむ屏風の内。門にはものもう。河内屋徳兵衛殿は此方か。山上講中頼みにつけ。稲荷法印御見廻申すと案内す。扨はおかちが祈禱なさる丶か一だん〳〵。私は高槻の返事が急ぐ。お暇申すと表に出。徳兵衛宿に罷ある早々御出忝けなし。あれへお通り遊ばせと。太兵衛歸れば法印は端の間にこそ通りけれ。踏締も無く世の中を。滑り渡りの油屋與兵衛。賣溜錢は色狂ひ。絞り取れて元も利も。かすも殘らぬ油桶。重氣に見せる汗はなつ。中はすゝしき明樽を。擔ふて宿へ歸りしが。ァ珍らしいお山伏。こなたは見知た白稲荷殿。妹が病氣禱の爲か。あの付物が其方衆の禱でのいたら。此與兵衛が首がけ。母者人は藥取にか。耆婆でもいかぬ死病。いはれぬ氣骨おらる丶。ァこれ親仁殿。おかちが煩ひより。何より大事が有る。其當座に母者人には云ふたれど。夫よりはつたりと打忘れ。今日ふつと思ひ出し。商賣や めて歸つた。跡の月野崎で。おぢ森右衛門様に行合。わざ〳〵飛脚もやる所。幸ひの便親達へ云ふてくれ。主人の金四ッ寶三貫目餘り引負ひ。此節季にたてねば。切腹か縊首一生の無心。兄太兵衛は義理も法も知らぬ奴。沙汰なしに三貫目調へ。與兵衛に待せて下されと。段々の傳言。二貫目や三貫目で伯父に腹切せて。此方衆の外聞世間が立まい。今日は二日。際といふて明日明後日。萬事を差置き今日の中。三貫目調へて渡さつしやれ。あす夜明にかけ出せば。昼までに往て戻ると。たつた今直筆のおぢの文の裏表。憎く可笑く。如何な伯父でも。主の金引わふ様な侍。腹切らせたがまし。何ンじやでたくさんに三貫目。三奴もおじやらぬ。お主が商賣。去年から一文も見せぬ。算用したら。三貫目や四貫目は、殘る筈。遣たくば其金やれ。追付婿を呼入る大事の娘が病氣。どんな評定する隙が無い。ァ法印様お待遠。おかちが様躰。御覽なされ下されと。余のことい丶ふて取あはず。ァ丶手柄に婿が呼れふば呼で見や。見物せうと親の前に足踏仲し。そろばん枕の胸算用。ぐはちりと違ふて見へにけり。父がそろ〳〵抱起す。おかちが顔の面やつれ。法印篤と見。ム年

は幾才。十五。病付は。跡の月十二日。ム、藥師如來の緣日。十五はあみだと。懷中の書籍繰ひろげ。指を折り仔細らしき聲付。そも〳〵。ほうざうびくの淨瑠璃に曰く。阿彌陀と藥師は御夫婦と云々。即ち此病は一時も早く婿殿を呼入。夫婦になりたいと思ふ氣病に。少し外の見入ありと。いふより徳兵衛尤も顔。法印圖に乘り。稻荷大明神の使者。白狐の敎髮筋程も違はぬ禱。かぢも藥同然。神佛にもその役〳〵。熱病さまし冷すには。比叡山の二十一社。温むるには熱田明神。あたまの病は愛宕權現。足の病は阿閦佛。走り人竊盜動かせぬは不動の鉄縛。がいきを禱るは風の宮。老人達の老病には。白髭明神白髮藥師。若衆の病の禱には。大慈大悲の地藏菩薩。かるたのゑの付祈禱に。麻布の明神釋迦牟尼佛。どう取の禱は四三五六しや大明神。八ッでうなゝの社。別して此法印が得物。錢小判俵物の相場商い。上げふと下げふと高下は自由。持のお方が價上したい祈りには。强氣に上り高間が原の八百萬神。旗下衆のさがりを禱るは。高きお山を時の間に麓に下るさがの釋迦。やすいの天神。持と旗と兩方一度の禱には。高からず安からず中を取て。河內の國高安の大明神。法力のあらたなこと。たなから物取て來る如く。禮物は大方三十兩何時でも受取。いで一禱と錫杖振立。いちたか珠數。さらり〳〵と押もんだり。印をも未だ結ばぬに。病人重たき顏を上。なふ祈りもいらぬ祈禱もいや。おかちが病愈すには。婿取りの談合止てたも。あの與兵衛が若氣もろ。借錢に責らるゝ。其苦しみが冥土の苦患。是ぞ呵責の責となる。ながれ勤の女子なりとも。與兵衛が契約の思ひ人を請出し。嫁にして此所帶を渡してたも。是非に婿を取りなば。おかちが命は有まいぞ。思ひ知たか思ひしれと。あたりをきよろ〳〵睨廻し。ア、づゝない苦しいと。悶へ慄なきそゝろごと。父は驚き色違へ。法印少しもおくせず。汝元來何處より來る疾く去れ〳〵。行者の法力つくべきかと。鈴錫杖をちりゝんがら〳〵。急々如律令と責めかくる。與兵衛むつくと起き。何を知つて去れ〳〵。どう山伏措おれと。落間にがばと突落せば。ヤ、山伏の法を知らぬか。印を見せずば置まじと。駈上りん〳〵鈴りん〳〵。引ずり下せば又駈上る。不動の眞言どたくたぐはつたりばつたりだ。引ずりおろされ山伏も。錫杖がら〳〵命から〳〵歸りけり。與兵衛親に膝まくり。是れ親仁殿。今のそゝろ言耳、へ入つたか。死んだ人を迷はせ。地獄へ落しても。此與兵衛が好た女房持せ。所帶渡すことは否かならぬか。ヤイ姦しいあたり隣もある

ぞかし。余程にほたへあがれ。此徳兵衛は。死んだ人の跡式とらひでも。五人七人は。もるりと過る術しつたれど。年忌命日もとふらひ。地獄へ落さず迷せまい爲に。名跡ついで苦勞する。わごりよが好たお山請出し。女房に持たせ。半年もたゝぬうち所帶破て。親方の弔ひもならぬ樣には得せまひ。扨は是非婿取て妹に所帶渡すな。ヲ、渡す。ム能云ふた道知らずめと立ち上り。俯ぶけに踏のめらし。肩骨脊骨うん〳〵〳〵と踏付る。なふ悲しや淺ましい兄樣と。妹が縋れば。おかち構ふな。彼奴が腹の慰る程。存分に踏しや〳〵と。身も働かず座も去らず。妹堪へかねあんまりな兄樣。私は何も知らぬ者。死靈のついた顏して此よに〳〵いふてくれ。其からは商賣も精出し。親達へ孝行盡し。逆らふまいとの誓文立てそれが嬉い斗に。病はうけた此姿で。こはい〳〵恐ろしい死人のまねして嘘吐せ。父樣を踏づ蹴つそれが親孝行か。年よつた父樣目でも眩ふたら。それは〳〵。聞事じやないぞと。縋り取付泣わめけば。いさ女郎め。吐すまいと誓文立てゝ口がため。憎いはうげた。死靈より此與兵衛といふ生靈の苦しみ。覺へておれと同じくがばと踏伏せたり。病疲た妹を蹈殺すか。畜生めと取付父親はつたと蹴とばし。腹のいる程踏といふたな。是で腹をいるわいと。顏も頭もわかちなく。さん〳〵に踏む最中母立歸り。はつと斗り藥投すて。與兵衛がたぶさ引攫んで。横投にどうとのめらせ。乘り懸り目鼻も云はせぬ握り拳。ヤイどう酒しめ。だいばめ。如何な下人下郎でも。踏の蹴るのはせぬこと。德兵衛殿は誰じや。おのれが親。今の間に其脛が。腐つて落ると知らぬか。罰あたりおとましや〳〵。腹の中から盲で生れ。手足かたわなものもあれど。魂いは人の魂い。己れが五體何處を不足に生付た。人間の根性何故さげぬ。父親が違ひしゆゑ。母の心がひがんで。惡性根入ると云はれまいと。さす手引手に病の種。おのれが心の釼で。母が壽命を削るわい。おのれ先度も高槻の伯父御が。お主の金を引おひしと。よふも〳〵此母をぬく〳〵と瞞したな。たつた今兄太兵衛に行合。おのれが野崎のあばれゆゑ。伯父は侍一分たゝず。浪人し大坂へ下るとの便。已れが虚言が顯れた。其の時母がつか〳〵と親仁殿へ咄し。跡で知れては。扨は親子の言合せと疑はれ。夫婦の義理もかけはてる。内でも外でも己れが噂。碌なことは一度も聞ぬ。その度毎に母が身の肉を一寸つゝ。削で取樣な因果晒しめ。半時も此内に置ことならぬ。勘當じや出てうせう。出され〳〵と擲つゝくはせつ。たゝく片手に押ぬぐふ。涙手のひら

なかりけり。此與兵衛が爰を出て。どこへ行く所がない。ヲ、己れが好たお山が所へ出てうせうと。小腕取て引出す。ノヲ兄様追出し私は此跡取てといや。堪へて進せて下されと取付ば。何知つてのいておれ。是れ德兵衛殿。さよろりと見て居て誰れに遠慮。ヱ、はがいひ。殿さ出して呉れんと。枴追取振り上くれば。ひらりと外しひつたくり。此枴でわごりよを打と。はた〳〵と打ちつくる。德兵衛飛かゝり。枴振とり。つゝけ打に七ッ八ッ息もさせず擲ちする。はつたと睨む眼に涙。ヤイ木で造り。土をつくねた人形でも。魂入れれば性根がある。耳あらば能聞。此德兵衛は親ながら主筋と思ひ。手向ひせず存分に踏れた。脇を借た生みの母に今の様。脇から見る目も勿体なふて。身が震ふ。今打たも德兵衛は打たぬ。先德兵衛殿冥土より。手を出してお打なさるゝと知らぬかやい。おかちに入婿取といふは。跡方もないこと。ヱ、無念な。妹に名跡繼せては。口惜と耻入り根性も直るかと。一思案しての方便。あの子は餘所へ嫁入さする氣遣ひすな。他人どし親子と成るは。よく〳〵他生の重縁と。可愛さは實子一倍。疱瘡したとき日進様へ願かけ。代々の念佛捨て百日法華に成。是程萬面倒見て大きな家の主にもと。丁稚も使はず肩に棒。稼ぐ稅遣ひはつく。己れ今の若盛り。一働きがせぎ。五間口七間口のかど柱の主人にと。念願を立てゝて。そ商人なれ。たつた一間半かの門柱に念かけ。母に手向ひ父を踏。行ささ僞り騙ごと。其根性がつゝいたら門柱は思ひもよらず。獄門柱の主にならふ。親は是が悲しいと。わつと叫び入ければ。ヱ、もどかしい德兵衛殿。石に謎かける様に口でいふて聞く奴か。出てうせ〳〵。うぢ〳〵ひろがば町中よせて追出すと。又追取て母がつゝはる枴の先。怖ひめ知らぬ無法者。町中と云ふにぎよつとして。と胸つきたるけでん顔。なふ兄様出して我は跡に殘らぬと。縋る妹を押留め。さり〳〵うせう。枴が喰ひたらぬかと。振上てすり出されて。越ゆる敷居の細溝も。親子別れの涙川。德兵衛つく〴〵と後姿を見送りて。わつと叫び聲を上げ。彼奴が顔つさ背格恰成人するに從ひ。死なれた且那に生寫。あれあの辻に立たる姿を見るに付。與兵衛めは追出さず。且那を追出す心がして。勿体ない悲いわいのと倒ぞ伏。人目も耻ず泣聲に。憎い〳〵も母の親。嗜む涙堪へ兼。見ぬ顔ながら伸上がり。見れども餘所の繪幟に。影もかくれて

下之巻

吹きなれし。年もひさしの。蓬莨湯は家ごとに。幟の音のざはめくは。男子持の印かや。娘斗の豐島屋は。亭主は外の掛一まき。内のしまひと小拂ひと。油賣たり舞たりに。三人の娘の世話。まあ姉からと。櫛笥取出しとさぐしに。色香採込み梅花の油。女は髪より形より。心の垢を漉櫛や。嫁入先は夫の家。里の住かも親の家。かがみの家の家ならで。家といふ物なけれども。誰世に許し定めけん。五月五日の一夜を女の家といふぞかし。身の祝ひ月祝ひ日に。何事なかれ撫つけて。髪引ゆづの妻櫛の齒の。ア悲し一枚折れた。惘れてとんと投櫛は。別れの櫛とて忌ことをと。口には言はず氣にかゝる。何ぞのつげのお櫛かや。掛も十をに七左衛門。大かた集て中戻り。ア、思ひの外早い仕舞。内の拂ひもさらりとしまひ。兩替町の錢屋から。燈油二舛梅花壹合。今橋の紙屋から通帳持て燈油一舛。當座帳に付て置。まあ洗足して早うお休息。明日はとふから禮に出さしやんせ。いや〳〵早う休まれぬ。天滿の池田町へ往ねばならぬ。アさやうとい最ふ宜ゐの池田町は北の端。近所の掛さへ寄たらば過てのこと。こな人何いやる。節季に寄らぬ金の。過て寄た例は無い。今日暮てから渡さふと詞つがふた。つい一走往てこふ。此うちかひに新銀五百八十目。財布の錢も戸棚へ入れて錠おろしや。やがて歸ろと立出る。申々そんなら酒一ッ。姉それ爛して進じやと。立て戸棚へ德利から銚子へうつせば。ア、こりや〳〵爛せいでも大事ない。肴も盃も入らぬ。中がさ添て持て來い。夜が短かい氣がせくそこからつげ。あいとは云へどどしでは手もとかかねば立上り。つぐも受るも立酒を。お吉見付てそりや何ぞ。忌々しい子共は頑是がないにもせい。立酒のんで誰を野送り。ア、氣味わると。云はれて夫もちやっと腰掛取直し。掛乞に行門出にはか行の立酒。此世に殘らぬ〳〵と。祝ふ程なを哀世の永き別れと出て行く。母を見習ふ姉娘。夜るの襖をしき〳〵に。御座よ枕よ。蚊帳の釣手は長けれど。屆かぬ足の短か夜や。おでんをろくに寢させて。母様もちとおやすみと云ひければ。ア、でかしやつた。父様もまだ遲かろ。蚊帳の内から表は母が氣を付る。我身もねゝしや。いな〳〵。わたしは眠たうでざらぬと。云ひつゝ眠るもおとなしゝ。此節季越にこされぬ河内屋與兵衛。手筈の合ぬ古袷心斗が廣袖に。提たる油の二升入。一しやう差ぬ脇指も。今宵こじりの詰りの分別。勝手知つたる豐島屋の。門の口窺く後より。與兵衛殿じやないか。ア、與兵衛じやが誰じやと。振返れば上町の口入綿屋小兵衛。ア こなたは順慶町へ

行けば。本天滿町親御の所へと云はるゝ。親御へゆけば追出した爰にはいぬと有。貴樣は留主でも判ゝ親仁の判。新銀壹貫目。今宵延ると明日町へ斷る。〻爰な人はいさかたの惡い。手形の表こそ壹貫匁正味は二百目。今夜中に濟せば別條ない約束では無いかいの。されば明日の明六迄に濟ば二百匁。五日の旭がによつと出ると壹貫匁。元二百匁を壹貫匁にしてとれば。こつちの德の樣なれど。親仁殿にひごうの金を出さするが笑止さに。こなた最負でせつくぞや。今夜屹度濟しやや。小兵衛こりや念いるゝな。河内屋與兵衛男じやゝあてが有る。鷄の鳴く迄には持て行く。眠むたくと待てもらを。はて今宵すまして入用なれば。明日又直に貸はいの。此方も商賣一貫目やゝ二貫目は何時でも。其男氣を見屆けたと。詞で與兵衛が首しめる。綿屋小兵衛は歸りける。與兵衛見事に請合は請合しが。一錢のあてもなし。茶屋の拂ひは一寸遁れ。扨差ならぬ此二百匁。有所にはあらふがな。世界は廣し二百匁などは。誰ぞ落しそふな物じやと。後を見れば小提灯。河といふ小文字は。此方の親仁南無三寶と。差たる店に平蜘蛛の。ひつたり身を付身を忍ぶ。德兵衛は氣も付ず。豐島屋のくゝりそゝと明け。七左衛門殿お仕廻かとつゝといれば。是は〳〵德兵衛樣。此方は未だ仕舞ず。天滿の端まで行かれます。私は取紛れお見廻も申さぬに。よふこそ〳〵。此際は與兵衛樣の事に付。いかひお世話でござんしよと。蚊帳より出れば。されば〳〵。御身は稚い娘御達の世話。我等は成人の與兵衛に世話を燒く。何れの道にも子に世話やむは親の役。苦勞共存せね共。引付て一所に有中は氣も落付。あの樣な無法者を勘當すれば。やけを起し明日火に入も搏はず。謀判似せ判。壹貫匁の銀に十貫匁の手劵して。一生の首繋がるゝ例もある事と思ひながら。生の母の追出すを。繼父の我等輕薄らしう留られず。聞ば順慶町兄が方に居るとやら。若此あたりへ狼狽て見へましたら。七左衛門殿御夫婦言合せ。父親はがつてん。隨分母に謝言いたし。胴姓骨入替。二たび內へ戻る樣に。御異見偏に賴み入。こちの女房お澤が一家一門皆侍。其習はかしか思ひ切ては見返らず。義理がたい生れ付其に似ぬ道樂者。本親の旦那もぎやうぎつよく。義理も情も知つたる人。二人の子供に心をつくすは皆故旦那への奉公。今與兵衛めを追出し。一生荒ひ詞も聞ぬ親方に。草葉の蔭より恨を受くる。無果報は此德兵衛一人。推量なされお吉樣と。烟草に涙さきらして。ひせ返るこそ道理なれ。思ひやりました。こちのも追付歸られう

逢てお話しなされませ。いや〳〵何家も今夜のこと萬事のお邪魔。是此錢三百女房が目顔を忍び。つい懐へ入て出た。與兵衛めがうせたらば追付正氣に赴き。さつぱりと肌の物でも買おれと。ゆめ〳〵我等の名を出さず。七左殿の心付か如何なりとも。御機轉頼入ると差し出す。後の門口。お吉樣お仕廻かと。おとづるゝは女房お澤が聲。德兵衛びつくり。ヘッ逢ふては氣の毒隱れたい。卒爾ながら御免なれと。かくるゝ蚊帳のうしろ影。是々德兵衛殿。我女房に隱るゝとは何事と。聲かけられて夫も敗もう。お吉もどまぐれ挨拶なく。そとには與兵衛。ヤア母のかまがわせた。何いはるゝとくるゝの穴。耳を付てゞ聞いたる。女房お澤腰打かけ。エ、德兵衛殿。七左衛門樣もお留主といひ。内のことはそこ〳〵に。何時あはふと儘の向ひどし。互に忙しいきはの夜さ。爰へは何の用が有。惡性する年でもなし。ムヤ又與兵衛めが事くやみにか。如何に繼しい子なればとて餘りに義理過た。しんじつの母が追出すからは。こなたの名の立ことはない。此三百の錢與兵めに遣るのか。つね〳〵に身をひゞめ。儉約してあいつに遣るは淵へ捨るも同然。其あまやかしが皆毒飼。此母はさうでない。ヤア勘當といふ一言口を出るが其限り。紙子着て川へはまらふが。油ぬつて火にくばらふが。奴が三昧惡人めに氣を奪れ。女房や娘は何になれ。ヤア〳〵さきへ歸しやれと。引立る袖をふりはなし。エ、女房、むごいぞやそうで無い。生立から親は無い。子が年よつては親と成。親の始は皆人の子。子は親の慈悲で立。親は我子の孝で立。此德兵衛は果報少なく。今生で人は使はずとも。いつでも相果し時の葬禮には。他人の野送り百人より。兄弟の男子に先與跡與舁れて。あつはれ死光りやらふと思ふたに。子は有ながらその甲斐なく。無縁の手にかゝらふより。いつそ往倒れのしやかになひが。ましでおじやるはと。又むせ返るぞあはれ成る。ア、與兵衛め斗が子では無い。兄の太兵衛。娘なれども。おかちはこなたの子でないか。ヤア〳〵早ふ先へと押出す。ハテ去るなら連立ふ和女もおじやと引立る。母の袷の懐中より。板間へぐはらりと落たは何ンぞ。綜一わに錢五百。なふ情なや耻しと。我身を蔽押かくし聲を上。德兵衛殿眞平許して下され。是は内の掛の寄與兵衛めに遣りたい斗。我が五百盗んだ二十年添ふ中。隔心隔ての有やうに情けない。たとへあの惡人めお談義に聞樣な。しゐりはんどくの阿房でも。あじやせ太子の鬼子でも。母の身でなんの憎からふ。いか成惡業惡縁が胎内に宿つて。あの通りと思へばふびんさ。可愛さは。

父親の一倍なれ共。母が可愛い顔しては。へたてた心に。餘り母があいたてない。がうばりが強ふて。いよ〳〵心が直らぬと。さぞ憎まるゝは必定と。態と憎い顔してぶつゝたゝいつ。追出すの勘當のと。むごふつらふあたりしは繼父のこなたに。可愛がつてもらひたさ。是も女の廻り智恵許て下され徳兵衛殿。私に隠してあの錢を遣て下さる心ざし。詞ではけん〳〵と慳貪に云たれど。心で三度戴さし。何を隠そふあいつは立派好もする奴。取わけ祝月髪付元結を調へ。人交りも爲たからふ。生れて此かた節句〳〵祝儀缺ぬに此月斗。身祝ひもしてやりたさ。見苦い此耻辱を洒すも。お吉様頼んで屆けん爲。まだ此上に根性の直る薬には。母が生肝を煎じて飲せといふ醫者あらば。身を八ッ裂も厭はぬ共。一生夫の錢金もじひらなかちがへぬ身が。子ゆへの闇に迷され。盗みして顯れた。耻しゆでざると斗にて。わつと叫び入ければ。道理〳〵と夫の歎き。子を持つものは身にこたへ。行末思ふお吉の涙折からに泣く蚊の聲も。いとゞ涙を添へにけり。祝日に心もない泣わめき不調法。其錢もお吉様頼み。與兵衛にやつてお暇申しやと。いへ共女房涙にくれ。こな様の遣て下さる其深い心ざしに。盗だ錢がなんと遣りよ。大事無いひらに遣や。いや許して下されと。夫婦が義理の遣かた無さ。お吉も涙とゞめかね。お澤様の心推量した遣憎い筈。爰に捨て置しやんせ。我が誰ぞ好さそな人に拾はせましよ。忝ない迚もの御情。此粽も誰ぞ好さそな犬に。喰せて下さんせと。又泣出す二親の。心隔てぬくゞり戸も。子の不孝より落ちたるくろゝ。開て夫婦は歸りけり。父母の歸るを見て。心一ッに打うなづき。脇差拔て懐ろにさいたるくゞりさらりと開。つゝと入より胸もくろゝも落付。七左衛門殿は何方へ定めて掛も寄りましよと。余所の方から裏問ける。誰かとこそ思ふたれ與兵衛様か。こな様は仕合な。後共云はず好い所へござんした。是此錢八百此粽。こな様へやれと天道かち降ました。戴かしやんせ。なんぼ浪人でも極の日の寶。まんがなおろと差出せば。與兵衛ちつ共驚ず。是が親達の合力か。早合點な追出した親達が。なんのこな様へ錢金を遣しやんしよ。いや隠さしやるな。先にから門口に蚊に喰れ。長々しい親達の愁歎聞て。涙をこぼしました。そんなら皆聞てか。能合點參りしか。他人でさへ目を泣さはらした。此錢一文も仇には成まい。肌身に付て一働。お二人の葬禮に。立派な乘物に乘せうといふ氣が無ければ。男でもくゞるでも無。夫を御背なされたら天道の罰佛の罰。日本の神々のおが

罰が當つて。將來が能有まい。先藏いてと差出せば。如何にも〳〵能合點しました。只今より眞人間に成て孝行盡す合點なれ共。勘心お慈悲の、錢か足らぬ。といふて親兄には云はれぬ首尾。爰には賣溜掛の寄金も有筈。新でたつた二百匁斗勘當の許る迄貸て下され。それ〳〵。おくを聞ふより口聞。どこに心が直つた虛言にも金貸て呉とはいはれぬ義理。世間の義理を欠いても。金借て惡性所の拂いして。跡から段々行ふでな。成程金は奥の戸棚に。上銀が五百目餘。錢も有は有なから。夫の留主に一錢でも貸てとはいかな〳〵。いつぞやの野崎參り。着物洗ふて進せたさへ。不義したと疑はれ。云ひ譯に幾日かいつたやら。なふうとましや〳〵。歸られぬ內其錢持て。早ういんで下さんせと。いふ程傍へにじり寄。不義に成て貸て下され。ならぬと云ふにくどい〳〵。くどふ云ふまい貸て下されい。女子と思ふて弄しやると。聲立て叫くぞや。與兵衛も男。二人の親の詞が。心根に浸こんで悲い物。弄るの侮るのといふ所へ行ことか。何を匿しませう。跡の月の二十日に。親仁の謀判して上銀二百匁。今晩限に借ました。まあ跡を聞て下され。手劵の表は上銀壹貫目。借た金は二百匁。明日になれば手劵の通。壹貫匁で返す約束。夫より悲いも

は親兄の所はいふに及ばず。兩町の年寄五人組へ。先樣からことはる筈。今に成て此金の才覺。泣ても笑ふても叶はぬこと。自害して死ふと覺悟し。是懷に此脇差さしは差いて出たれども。只今兩親の歎き御不便がりを聞ては。死で此金親仁の難義に掛ること。不孝のぬり上身上の破滅。思ひ廻せば死るにも死なれず。生ては居れず詮方なさに見掛ての御無心ぞや。無ければ是非もなし。有金たつた二百匁で。與兵衛が命を繼で下さるゝ御恩德。冥途の底迄忘れうか。お吉樣どうぞ貸て下されと。いふ目の色も誠らしく。そうした事も思ひながら。兼ての僞り是も又。其手よと思ひ返して。まが〳〵しいあの虛言はいの。まだ尾鰭付ていはしやんせ。ならぬと云ふてはきつうならぬ。是程男の名利に掛誓言立ても成ませぬか。はあ何とせう借ますまいと。いふより心の一分別。そんなら此樽に油二升取替て下さりませ。夫は互の商ひ內。貸借せいでは世がたゝぬ。成程つめてと賣場にかゝり。消る命の燈火は油盡るも夢の間と。知らで升取柄杓取。後に與兵衛が邪見の刀。拔て待ども見ず知らず。祝ふて節句も御仕廻なされ。こちの人共割入て相談。有金なれば役に立ま い物でなし。五十年六十年の夫婦の中も。儘にならぬは女のならひ。必らず我を怨んでば

し下さるなといふ内に。燈油に映る刄の光お吉びつくり。今のは何ぞ與兵衛様。ハヤ何でも御座らぬと脇差後に押隠す。それ〳〵屹度目もすはつて。なふ恐ろしい顔色。其右の手爰へ出さしやんせ。おつと脇差持かへて是見さしやれ。何も無い〳〵と云へ共。お吉身もわな〳〵。こな様は小氣味の悪い。必らず傍へ寄まいと。跡退りして寄門の口。明て逃んと氣を配れど。ハきよろ〳〵何おそろしいと付廻し〳〵。出合へとかめく一聲。二聲待す飛懸り取て引絞め。音ぼね立つるな女めと。喉笛の鎖をぐつと刺す。刺〳〵れて惱亂手足をもがき。そんなら聲立まい。今死んでは年はもいかぬ。三人の子が流浪する。其が可愛ひ死とも無い。金も入程持て御座れ。助けて下され與兵衛様。ヲ、死に共ない箸尤も〳〵。こなたの娘が可愛程。己も己を可愛がる親仁がいとしい。金拂ふて男立ねばならぬ。諦らめて死んで下され。口で申せば人が聞。心でお念佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と。引寄て右手より左手のふと腹へ。刺てはゑぐり抜ては切。お吉を迎ひの冥土の夜風。はためく門の幟の音あおちに賣場の火も消えて。庭も心も闇みに。打まく汐流るゝ血。踏のめらかし踏すべり。身内は血潮のあかづら赤鬼。邪見の角を振立て。お吉が身をさく劍の山。もく

せん油の地獄の苦痛。軒の菖蒲のさしもげに。ちゝの病はよくれ共。過去の業病逓れぬ。菖蒲刀に置露のたまも亂れていさ絶たり。日比の強さ死顔見て。どつと我から心もおくれ。膝節がた〳〵がたつく胸を押しさげ〳〵。さげたる鍵を追取て。窺ければ蚊帳の打けて。寢たる子供の顔付さへ。我を睨むと身も震へば。つれてがらつく鍵の音。頭の上に鳴雷の。落かゝるかと肝にこたへ。戸棚にひつたり引出すうちがい。上銀五百八十匁宵に聞たる心當。ねぢ込ねぢ込ふとこころの。重さよ足もおもくれて。薄氷を履火焔踏。此脇差はせんだの木の橋から川へ。沈む來世は見へぬ沙汰。此世の果報の付時と。内をぬけ出一さんに足に任せて。をしてゐや。浪華の春は京にまけ。京は浪華の景色より。おとるみな月なつかぐら。遊廓四筋は四季共に散こと知らぬ花揃。妓の風俗揚屋のかかり富士も及ばぬ戀の山。第一日本の名所なり。一年三百六十日。紋日が三日足らぬとて。くつはゝなげく。女郎は其程客に厄介を。へんがへに行客も有。好んで頼み頼まるゝ。客は一際いかつげに。籠を飛する揚屋客。扇で忍ぶ茶屋の客。一座あそびは女房めく。肩で風切からぞめき。位を問は田舍客。寢て物語る馴染客。太鼓過てと囃くは女郎の手もめのふる廻客。

親おや方の持客有り。我身上のめつきやく有。飛脚も交り行通ふ。道の間をしばらくも。口たゝ程は耻らしく。役者物まね地の物まね。小歌浄瑠璃口てんがう。西口東口々に。行も歸るもさはり無き。夕べ〳〵の大寄は豐なる世の績なり。されば山本森右衛門。與兵衛が身持の知せに驚き。暫く主人に暇請大坂へ立越しが。女殺て金取しも。慥に夫とは知れね共。衆目の見る所與兵衛に指差す身の放埒。若やと詮義も寄付ねば先さ〴〵尋ね廓の内。東口にて尋しにそんじよ其處とは教へしかど。何れも同局のかゝり。爰や備前屋。是や教へ備前屋かと。見まがいたゝずみ居る折ふし。手にかさ高な文持て。西の方からくる禿。是々物問ふ。備前屋と申す傾城屋はいづかた。其御内に松風殿と申す傾城。御存じならば教へてたべ。我等當所不知案内頼入とぞかたくろし。ッえさひらしい物の言樣。備前屋は此家。西の端に戸のさいた。客の有る局が松風樣でござんす。コレお侍樣。左の足あげさんせ。ッレ〳〵又右の足も上さんせ。ヲ、能上さんした。いかい世話のと。弄てびんしやん行過る。所柄とて人に馴れ氣輕い奴と打笑ひ。教へ局に立寄ば。内に火影は有ながら戸口ひつしと立詰たり。扨こそ客は與兵衛に極る。出るを捕へ逢はん物と。待間程なく戸を開き。編笠かつぎ立出る。すかさずむずとひん抱かゆる。女郎も次いてこりや誰ぞ。卒爾せまいと引別る。苦しからず卒爾で無。己れ與兵衛め匿れたらば逢ふまいかと。笠引ちぎり顔見合せ。ヤアこりや與兵衛で無人違。まつぴら〳〵面目なやと。腰折て手をすれば。さやつも忍びの懸やらん。うなづく斗顔かくし東の方へ走行。河内屋與兵衛に深い中と音に聞松風殿。昨日にも今日にも。與兵衛は爰元へ參らずか。氣遣の無用事有て尋る者。隱されては彼が爲ならず。ヤア正直が聞たい〳〵。まちッと先に見へまして。是から直に曾根崎へ。叶はぬ用とて御座りんした。何じや曾根崎へ。南無三寶遲つた。拙者も跡から參らずば成まい。次手にも一ッ尋ませう。五月の節句前か。後か。六月へ入ては漸々六日。其間に爰元で金銀の拂ひ。金澤山に使たことは御座らぬか。是も隱さずお知らせなされ。どうでざんすぞ金のことは存やせぬ。やり手にお問なさりんせと。いひすて局についと入る。是は我等不調法。よしそれとても與兵衛に逢へば知るゝこと。道も知つたる曾根崎へ。たつた一飛一走と尻三のづ迄ひつからげ。もみにもふでぞ。君を待夜はよやよやよ。西も東も南もいやよ。兎角待夜は北がよい。さきにも待は待なから。こちからひたと行通ふ。道の大さへ

見知る程。うつゝ抜せし河内屋與兵衛。小菊にあふせを頼ものかりよ。新町の花を見棄て硯川。爰の花屋にたゞり寄。後家のお龜出迎ひ。たま〳〵見へるお客にこそ。よふお出がさうあうなれ。與兵衛様は爰が家。ちと風變り御出を止て。戻らしやんしたか。小菊様呼びましや。内は上下座敷もつまる。濱の床几で大〳〵酒盛。さり〳〵と呑かけましよ。小菊様ナ、爰へ行燈に油さしや。油の次手に油屋の女房殺。酒屋に仕換て幸左衛門がするげな。殺手は文藏憎くいげな。與兵衛様まだ見ずか。小菊様連ましてちとお出。やれお盃持てこいとたつた獨でべり立る。後家たしなめちと人にも物言せい。生れて與兵衛てんなむさい床几の上で。酒飲だ事なけれど今日は許す。東隣借足して。與兵衛が座敷分に一つこしらや材木大工諸色諸入め。見事に我等仕つるさつい物か〳〵。ヱ、げびた此湯鉢の薄い切様はと。潜上たら〳〵暴酒。しばらく時をゞ移しける與兵衛爰に居るか。知す事が有て來たと。刷毛の彌五郎床几に腰かけ。我を侍がさがすぞよ。してそりやどんな侍がと。胸にぎつくり横たはるゝ。心に包む惡事の塊。俄に顛倒うろ〳〵眼。ハテきよろ〳〵すないやい。昨日から兄が所へ來て居る侍じやとやい。ア、夫で落付た高槻のおぢ森右衛門。逢ては難義爰へ尋て來もしれぬ。早ふはづして逢共無ゞ。思へゞ急にも立れねば。何がなしはにと見廻し〳〵。ア、思ひ出した。新町に紙入忘れて來た。中にうめく程金入て置た。つい一走り取てこふ。刷毛も來いと立出る小菊引留。アさは〳〵と何じやの。有所の知れた紙入。明日なとととらんせ。イヤそうで無〳〵。ふところが重とふ無ければ。つんと遊ぶ心がせぬと袖引放し二人連。根から忘れぬ紙入の。からせい吐て急ぎける。熱い茶四五服飲程の間もすかさず森右衛門。行燈目的に花屋の門口。花車に逢ふ爰へ〳〵と呼出し。河内屋與兵衛が跡追て參つた。二階に居るか下座敷か。罷通るとつゝと入る。是々申。新町に紙入忘れたとて。たつた今お歸り。何だ歸た。未だ梅田橋越か越さずか。是はしたり又跡へん。然らば明日にも與兵衛が參次第。酒でも飲せ爰に留置さ。早々本天滿町河内屋德兵衛方迄吃度知らせ。只今參がけ櫻井屋源兵衛へも立寄。吟味致せば五月四日の夜。大金三兩錢壹貫文。取たと有。爰元へは何程拂た。隱しては其方が爲にならぬ。直すぐに言へ〳〵。私方へも五月四日の夜に入て。大金三兩錢壹貫文。其夜は何を着て參つた。廣袖の木綿袷。色は慥花色か。しつかりとは覺ませぬ。ムよい〳〵。はいれ〳〵と言ひすてゝ。元來し道を引返し

又新町へと。變生男子の願を立。女人成佛誓たり。願以此功德平等施一切どう發菩提心往生安樂國。釋の妙意。三十五日お逮夜の心ざし。お同行衆寄集り勤も已に終りける。中にも同行中の老体。帳紙屋五郎九郎。昨日今日の樣に思ひしが。早三十五日の逮夜に罷成。二十七を一期として不慮の横死。平生の心立人に優れ。上人の御恩德報謝の心も深かりし。此世こそ劔難の苦はありとも。未來は諸々の業苦を除き。本願往生疑ひはよも有まじ。此御さいそくに心驚き。彌一遍の唱名も悅んでお勤なされ。必ず歎せらるな七左殿殺手も其内知ませう。たゞ御息女の介抱が第一。先立人も夫をこそ滿足と。しめせば有がた涙ぐみ。左樣とも〳〵。お吉がことは思ひ忘れ。是も如來のお蔭と。信心堅固に悅びを重ね。行住坐臥に稱名は欠しませぬ。去乍乙のおでんめは二つ子。乳が無てはと不便に存じ。死だ翌日金付て餘所へもらわします。姉は能いひ聞せたれば合點して。香花の絶ぬ樣に佛壇について斗いますが。なふ中娘めが朝から晩迄。母樣〳〵といふて泣居ます。是には困果ましたと。もやつと後の壁向て聲を呑だる啜泣。尤もさこそと同行衆も。濡さぬ袖は無りけり。折節居間の桁梁。通る鼠の怪しからず。蹴立蹴かくる煤埃。故紙をちらりと蹴落して鼠の荒は靜りぬ。ソレ何やら落た七左殿。誠に是はと取上見れば。半切紙に一ッがき。十匁壹分五厘。野崎の割り付。五月三日と斗りにて。誰から誰への名宛もなく。色こそ變れ所々血に染つたる書出し一通。不思議の物と手に取廻し。是は誰やら見た手じやはいの。我等もどうやら見た手の風。ア、河内屋の與兵衛〳〵。それよ〳〵と四五人の。口も與兵衛に極れば。思出して七左衛門。誠に死だ亡者が物語。四月十一日我等夫婦。野崎參致せしに。皆朱の善兵衛。刷毛の彌五郎。河内屋與兵衛三人連で參りしと咄せしが。其割付に極た。お吉を殺手も大方是で知ました。三十五日の逮夜に當り。鼠が是を落すといふも。亡者が知せに疑ひ無。是も佛の御恩德。ア、南無阿彌陀とひれ伏て。悅ぶ心ぞ道理なる。氣味惡乍をそ〳〵の。訪音づれも我仕たと人に言れじ覺られじと。一倍大柄そらさぬ顏。河内屋の與兵衛でやすとつゝと入。つい三十五日の逮夜に成りましたの。殺した奴も未だ知れず。氣の毒千萬。したが追付知れましよと。我と口からむかふの吉左右。七左衛門尻ひつからげ棒追取。ヤイ與兵衛。女房お吉を殺したな。おのれは爰へ縛れに來たか。通れはないと棒振上る。ア、七左衛門聊爾するな。シ己が殺した其證據は。いふな〳〵。野崎參りの割

付。十匁一分五りんといふ書付。所々に血も付て己が手に紛い無。此外に證據が入か。同行衆捕て下されと。つかみつかん其勢。南無三寶現れしと。突上る胸の動氣じつと押へて苦笑。此廣い世間。幾人も似た手が有まい物でなし。野崎參りの入用は己が奢。割付も何にも知らぬ。よい年をして馬鹿ひろぐな。己等迄も同樣に立騒いで何と仕居。まつこうすると。攫み付を取て投。寄ば蹴倒し踏こかし。一世一度の力の出場。裾ねぢたくり一振ふればわつと逃る。隙を伺ひ逃とすれば。ソリヤ逃すなと追取まく。小庭の内を追つ返しつ。二三ど四五ど隙を見合せ。ぐらりぐらりと逃出る。門の前に兩三人どつこい捕たと。胸がい摑んで捻すゆれば。撿非違使の別當大裡の廳の官人なり。跡に續ておぢ森右衛門聲をかけ。最前より各表に立玉ひ。家内の一々殘ず聞屆けられしぞ。必ず未練に陳ずるな。、是非も無ナ世間の風説。十人が九人おのれを名ざす。聞度に此おぢが心の中を推量せよ。事顯れぬ先遠國へも落すか。さなくば自害をすゝめ。恥を隱しくれんと。新町曾根崎行先〳〵を尋ても。跡へ廻り跡へまはり。出合ぬは己が運の極め。それ太兵衛其拾是へ〳〵。則五月四日の夜着し出たる己が拾。所々のさは付てはいり。大裡の廳より御不審。只今證跡の實否。己が命生死二ッの界成ぞ。誰か有る酒々。あつと云より銚子燗鍋。手々に引提さら〳〵さつとこぼしかけ。かゝる甥持弟持心を碎く涙の色。酒潮變じて紅の血潮。伯父甥顏を見合て。あつとより外詞なく惘れ果たる斗なり。與兵衛覺悟の大音上。一生不孝放埒の我なれども。一紙半錢盜といふ事遂にせず。茶屋傾城屋の拂は。一年半年遲なはるも苦にならず。新銀壹貫匁の手弟借り一夜過れば親の難義。不孝の咎勿体なしと。思ふ斗に眼付。人を殺せば人の歎。人の難義といふことに。ふつゝと眼付かざりし。思へば二十年來の不孝無法の惡業が。魔王と成て與兵衛が一心の眼を眩まし。お吉殿殺し金を取しは河内屋與兵衛。仇も敵も一ッ彼岸。南無阿彌陀佛と云はせもあへず。取て引ッ敗縄三寸に縛上れば。早町中が驅付け〳〵。すぐに引立引出す。果は千日千人聞。萬人聞ば十萬人殘る方なく世のかゝみ。傳て君が長き世に。清からぬ名や殘すらん。

女殺油地獄終

明治廿四年九月九日印刷
明治廿四年九月十日出板（戯曲叢書第五冊）

（定價金七錢）

發行者　早矢仕民治　神田區宮本町五番地

印刷者　松本秋齋　本郷區湯島壹丁目拾三番地

發兌元　丸善書店　日本橋通三丁目

全　武藏屋叢書閣　神田區宮本町五番地

賣捌書肆

神田南神保町　松江堂
神田淡路集館内　黒雲堂
神田裏神保町　上田屋支店
京橋彌左衛門町　巖々堂
京橋尾張町　東海堂
芝南佐久間町　栗ばら

神田區表神保町　中西屋
日本橋通一丁目　大倉書店
本郷區元富士町　盛春堂
本郷四丁目　文壽堂
神田錦町一丁目　武藏屋
濱　丸屋書店

京都　同　大坂　大坂　神戸　大黒屋
便利堂
丸屋書店
博聞分社
吉岡書店
久榮堂

版權登錄

口上

弊店出版の戯曲小説類に付御注告或は御尋問等被成下候諸君にして往々匿名の御狀有之候て御答申上候事も難出來誠に不本意の至りに存候間何卒御本名住所等御認有之度候

叢書閣出版目錄

神田區宮本町五番地

○故近松門左衛門作淨瑠璃本既刊書目

興行年月は聖曲類寫に依る

毎冊定價七錢郵稅二錢

一出世景清　貞享三年二月初興行　廿四年七月四板
一天智天皇　元錄二年三月初興行　二十四年四月四板
一十二段　元錄三年三月初興行　廿四年六月五板
一百日曾我　元錄十年十月初興行　二十四年三月四板
一源氏烏帽子折　元錄十二年正月初興行　二十四年三月出板
一蟬丸　元錄十四年五月初興行　二十四年三月再板
一最明寺殿百人上臈　元錄十六年三月初興行　廿四年五月再板
一曾根崎心中　元錄十六年五月初興行　廿四年三月出板
一心中重井筒　寶永元年四月初興行　二十四年二月三板
一雪女五枚羽子板　寶永元年七月初興行　廿四年五月出板
一傾城反魂香　寶永二年八月初興行　二十四年四月再板
一心中二枚繪双紙　寶永三年三月初興行　廿四年三月出板
一戀八卦柱曆　寶永三年九月初興行　廿四年四月四板
一堀川波の鼓　寶永四年二月初興行　廿四年七月出版
一心中万年草　寶永五年四月初興行　廿四年七月出版
一今宮の心中　寶永七年正月初興行　廿四年五月再板
一夕霧波阿鳴渡　寶永七年七月初興行　廿四年九月出版
一冥途の飛脚　正德元年三月初興行　廿四年九月出版

○此符號と合卷
◎此符號と合卷
□此符號と合卷
△此符號と合卷

合卷
◎
合卷

一吉野都女楠　正德元年九月初興行　二十三年九月出板
一堀山姥　正德二年七月初興行　二十四年二月三板
一國性爺合戰　正德五年十二月初興行　二十四年一月出板
一日本振袖始　享保三年二月初興行　二十三年八月再板
一曾我會稻山　享保三年七月初興行　廿四年五月出板
一博多小女郎浪枕　享保三年十一月初興行　廿四年三月出板
一本朝三國志　享保四年二月初興行　二十四年三月三板
一雙生隅田川　享保五年八月初興行　二十四年二月出板
一心中天の網島　享保五年十二月初興行　二十四年三月出板
一心中宵庚申　享保七年四月初興行　二十四年二月出板
一關八洲繫馬　享保九年正月初興行　二十四年一月再板
一伊達染手綱　享保十七年六月初興行　二十四年三月再板

△此符號と合卷
●此符號と合卷
＊

○但シ貸積トアリ

○諸名家戲曲傑作

毎冊定價八錢郵稅二錢

一太平記綱目　大塔宮曦鎧　近松門左衛門添刪　竹田出雲・淨瑠璃　松田和吉　合作　享保八年二月初興行　廿四年四月再板
一心中二ッ腹帶　紀海音作　享保七年四月初興行　二十四年二月出板
一末廣十二段　紀海音作　合卷　元錄十五年五月初興行　二十四年二月出板

○浮世草子

一好色五人女　井原西鶴作　貞享三年開版
一好色一代男　井原西鶴作　天和二年開版
一傾城買二筋道　梅暮里谷峨作　寛政十年開版

毎冊定價十二錢　郵税二錢

新篇大和文範

全部十二卷　第一冊發兌　定價金二拾五錢　郵税金六錢　廿四年一月再版　廿四年四月再板　廿四年五月出板

目錄●御所櫻堀川夜討●新板歌祭文●鎌倉三代記●男作五鴈金●仁德天皇万年車●金平法問詰

●改進新聞評　舊篇大和文範に比して撰擇の眼孔同日の論にあらず大才と抱懷して竊に大笑界に萬世と弄したる戲作文壇の諸英雄是より浮ばん本編所載(中略)六部となす就中三代記の如きハ海音中の出作なるかな發行所ハ云々

傾城買二筋道

梅暮里谷峨作　全三冊合卷　定價金十二錢　郵税金二錢

●報知新聞評　叙情の書千百齣ならず而して愛誦の種何ぞ限らん或者ハ梅暦と愛し或者ハ娘節用と愛す然り娘節用の凄咽多趣にして梅暦の情思纏綿たる所亦た是れ一種の造詣固より及び易からざる者あり然れども之と本書の高雅にして俗味なく能く捲々たる男女双間の談話と把て情義并び至れるの姿致と寫し以て泣くべく誦すべきの文字と作りたるに比すれば知らず其技倆孰れの優にして孰れか劣余輩未だ俄かに之と以て梅暦娘節用の上に冠するハいざるも亦未だ之と以て二書の下に措くと肯する能ハざるなり

●改進新聞評　梅暮里谷峨の傑作にして寛政年間に出版せられたる蒟蒻本なり初篇出て喝采と博し二篇三篇次で出づ皆通子の爭ひ求むる所となりしとこのや今の小説界中にて夙に其名と知られしと雖も通常人の之と知るハ至つて稀なりし今此出版あり谷峨の才名是より彌よ明治年代に普知せらるゝと得ん曉鐘館出版の合本中にも此書の初篇と出すと雖ども僅に其下半と出すに過ざれば以て相比するに足らず

●都新聞評　梅暮里谷峨の筆艶詞綺語に其妙と見ず却て悲況哀傷に袖と濕はす此二筋道ハ讀者の知る如く一篇の哀情史實意と云ふものと哀れに寫し出したるなり印刷製本共に鮮明

●亞細亞評　寛政年間、梅暮里谷峨作の飜刻なり。其の原作の價値は、發行者の緒言に盡せり、眞正の戀愛に近き情愛と寫したるは、この德川末世紛々たる雜籍の間、娘節用と此書のみといふ。當時の風として事皆狹邪猥瑣の事に渉れど、浮靡に流れざれば良家士女の讀むにも適す。印刷は極て鮮明、校訂舊本よりも最も行届きたり。

○廣　告

○油繪の具類　○手帳白本類　○狀袋卷紙類
○水繪の具類　○樂譜用紙　○筆墨類
○インキ各色　○インキ入　○ペン及ペン軸
○畫學用紙類　○筆　摺　板　○木　炭　筆

右の外文房具類一切揃置直段格別相働販賣仕候間多少に不係御用向被仰付度奉願下候

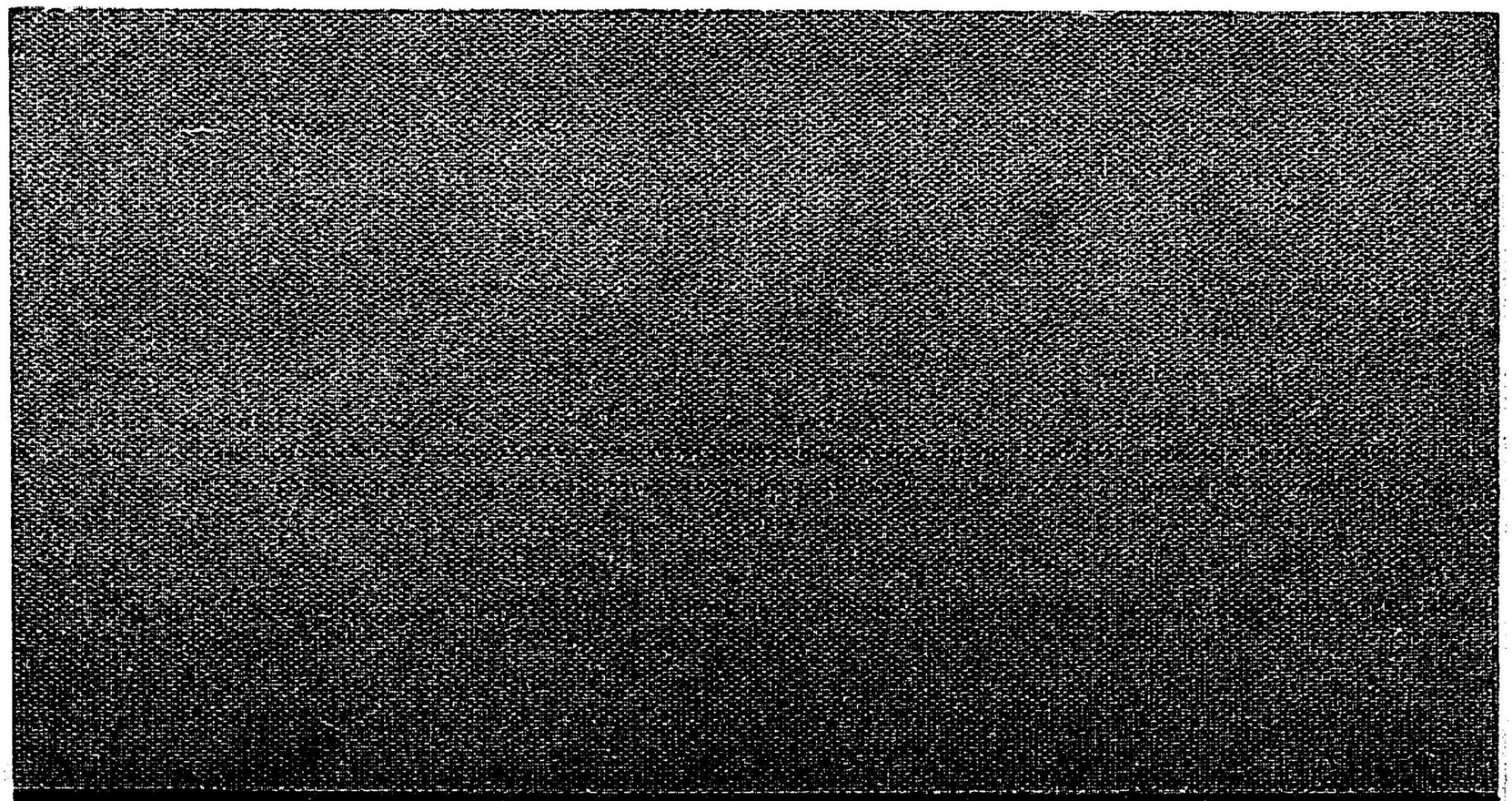
文房堂
神田區表神保町二番地

左記の原本御所持の方有之候はゞ當時の市價と以て御讓受と願ひ度又御秘藏のものなれば
相當の寫字料と呈して拜借致致度候に付左へ向御通知被下度候

神田區宮本町五番地
叢書閣

○日蓮上人記　近松門左衛門作
○あかめ與兵衛卯月の色上　同人作
○蓋盤太平記跡追一段物　同人作
○聖德太子繪傳記　同人作
○夕霧阿波鳴渡　同人作

다 K-15



912.4
Ti238i

生玉心中
女殺油地獄

国立国会図書館

088182-000-5

912.4-Ti238i

生玉心中・女殺油地獄

近松　門左衛門／著

M24

DBI-0005